# 門前　First Cours「さよならハルス」

KMY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
門前　First　Cours「さよならハルス」

【Nコード】
N9823D

【作者名】
KMY

【あらすじ】
門前に倒れている少女ハルスは魔法使い！？治とハルスの二人を中心にして、一ノ谷中学校で繰り広げられるファンタジー。前書いた「居候」をリメイクしてさらにつまらなくしした小説です。

# 第1話　she is a witch

真っ青な上で、太陽は照っていた。
治の家の門の前に、少女はうつぶせになっていた。その少女は、桃のようなピンクの髪を背中の半分以上まで伸ばしていて、髪の下には黒いマントが、首からひざまでその少女の体を覆っていた。
治がそれを目撃したのは、小学校から下校して家に着いた時である。家の周りには一戸建てがすらりと並んでいて、アパートやマンションは数えるほどしかない。道は普段は常に人が一人か二人は通っているのだが、こんな時に限って治のほか誰もいない。
治はこの少女をどうしようか迷った。治は、昨日の日曜日父に買ってもらった長編小説の続きが読みたいのである。しかしこの少女を起こして迷子として交番に連れていったら、小説を読む時間が減る。だからといってこのままにしておくと、少女は門のすぐ前に倒れているので門にさわれない。なぜ今までここを誰も通らなかったのか、それとも見て見ぬ振りをしたのか。治は唇を噛む。
ざんざん迷った挙げ句、治はその少女をまたいで門へ行くことにした。何をやってでも読みたいほど面白い小説だったのである。
治はそれを決行した。
道の上に髪の毛しかのっていなさそうなところを選んで、そーっと右足のつま先をつける。両足だと倒れそうだったので右足だけつけて、門のノブにさわる。
「こら！人をまたぐとは何事じゃ！」
後ろから突然大きな声がしたので、治は後ろを向く。そこには、ハゲで深い緑色の着物を着ているおじいさんが、白い小さなかわいらしい犬に首輪をつけて横に従えていた。
このおじいさんは、マナーに極端にうるさく、近所からマナーじいさんと呼ばれ嫌われている。治はしまったと思ったが、とっさに回避策を思いついた。

「マナーじいさん、今日も西郷隆盛のまねですか？」
マナーじいさんの険しい表情が一気にゆるむ。それを見て、治はほっとした。マナーじいさんは、西郷隆盛という単語を聞くと、とたんに機嫌がよくなる。理由は誰にも分からない。マナーじいさんとのやり取りで右足がつっかえていたので、マナーじいさんがすっかり上機嫌で犬を連れていってしまうと、治はほっとした。門を開け、もう一つの足を門の中に入れる。
しかしここで治は一つミスをした。右足も門の中に入れようとした時、少女の髪に引っ掛けて転んでしまった。治はしまったと思い慎重に立ち上がり、おそるおそる後ろを見る。少女は起き上がってしまっていて、治の目の前でゆっくりと立ち上がる。その少女の顔を見て、治は心臓がどきどきしているのを感じた。少女の目は少し薄めのピンクで、唇も細く薄いピンクだった。ピンクの髪の毛はひじの辺りまで伸びていた。まるで外国人だ。制服なのか制服ではないのか妙なオーラを放っている白いカッターシャツ、茶色のスカート、黒いマント、そしてその妙にかわいらしい顔が、調和しているともしていないともとれた。その少女と目が合うと、治は慌てて目を反らす。
「ここは……、どこ？」
少女が、天使のようなやわらかくもろい声でしゃべる。
「見てませんよ、最初から」
治は視線を反らしたまま答えた。小学6年生になったばかりでいろいろあって疲れたから幻を見たんだな。治はそう判断し、ささっと家のドアの方を向く。
「ちょっと」
後ろからまだ声がしたが、治はそれを空耳と自分で自分にむりやり納得させる。
「何でさっきから無視するの！」
さらに強い声で言われ、治はしょうがなく後ろを向く。が、少女とまともに目を合わせられない。それでもむりやり少女の顔を見つ

める。ある程度話したら帰ってくれるだろう。治はちょっと軽い気持ちで答える。
「ここは東京の」
「トーキョー？」
少女は不思議そうな顔をする。
「って何？」
それを聞き、治はびっくりする。
「だから日本の首都の」
「ニホン？」
少女が再び不思議そうな顔をする。治は、前例が2つしかないのに、なんとなくその次の言葉が予想できた。
「って何？」
その予想は当たっていた。治は考えた。どうすれば日本の場所を分かってくれるのか。………。
「極東」
この少女はピンク色の髪と目からして明らかに外国人である。欧米の人から見ると日本は東の東のまだ東、極東に位置づけられるのである。治は、これはいけたかと思ったが、少女の反応はそれに反するものであった。
「キョクトウって何」
「はい？」
治は耳を疑った。いや待てよ、アメリカ人？アメリカからなら日本は・・・・・そうだ、ジャパンだ、ジャパン。
「ジャパンなら知ってるだろ」
「じゃぱんって何」
治の望んでいたものとは全く違う返事であった。それじゃ何人なんだよこいつは。治があれこれ、どう言えばわかってくれるか考えているうちに、少女の方から切り出した。
「そんなことより、モルデスはどっちなの？」
「もるです？」

いきなり聞いた事もない単語が出てきて、治は当惑する。
「モルデスって？」
「わたしの故郷」
「何の名前」
「国の名前」
少女が答える。いや待てよ、そんな名前の国ってあったかな。治が、それはアフリカなのか南アメリカなのか尋ねようとした時。
ぐー……。こんな音が聞こえてくると、少女は顔を真っ赤にしてうつむく。
「腹がへったの？」
治が尋ねると、少女は恥ずかしそうにうなずく。治はしばらく考え、そして優しそうに少女に言う。
「入れよ」
「うん」
少女はうなずく。
「で、君の名前は」
治が思い出したように尋ねると、少女はゆっくりはっきりと答える。
「ハルス」
「ハルス？」
治はその名を、どこかで聞いたような感じがした。
「どうしたの？」
ハルスと名乗るその少女に尋ねられると、治はあわてて首を横にふる。
「何でもない」
「あなたの名前は？」
「あ……俺は零時治（れいじおさむ）」
「変な名前」
「変な名前はないだろ」
治は不快な顔をする。かわいい少女に自分の名を変と言われたこ

とが悲しかったのである。
「ごめん」
治のその顔を見て、ハルスはそう答える。

家のドアを前にして、治がドアノブに手を伸ばそうとした時、ハルスは拍手をするかのようにパンパンと、手のひらを叩く。顔は真剣であった。治は不思議そうにそれをながめ、何か尋ねようと思った時、ハルスがしゃべりだす。
「おかしい、返事がない」
「何の返事だよ」
治は奇異な顔をして、ハルスの顔をまじまじと見つめる。ハルスはぴんとひらめいたような顔をし、それから治を指さす。
「ってことは、あんたが隷(しもべ)？」
「はい？」
治が目を点にすると、ハルスはドアの方を指さす。
「さっさと開けて」
明らかにそれは命令であった。本来は自分が開けるのだが、命令口調でそれを言われると、必然的に人は腹が立つのである。
「何で俺が開けるんだよ」
「隷だもん」
「だから何で俺が隷なんだよ」
「隷だから」
ハルスがつんとした顔でそう言うと、治は頭にきてハルスに怒鳴る。
「お前が開けろよ」
「あら？隷の分際でご主人様に命令してもいいわけ？」
ハルスはまゆをひそめ、脇から先のとがった木の棒を取り出し、治に向ける。
「死にたくないの？」
「何の話だよ」

「だから、死にたくないの？」
ハルスの顔は鬼気立っていた。治はなんとなくこれを嫌がったら死にそうな気がし、しぶしぶドアを開ける。
「入れよ」
「お帰りなさいませご主人様、でしょ」
「そんなおかまっぽい事言えるかよ」
ハルスは返事もせずに玄関に入り、靴をぬかずに廊下に上がる。
「おい」
治はドアを閉める。
「何よ」
ハルスは振り向く。
「靴をぬげよ」
「あら、靴は玄関でぬぐの？下品ね」
ハルスはそう言い、靴を脱いで廊下に上がった治を蹴り飛ばす。
「何すんだよ、人の家で」
玄関で体勢を直して立ち上がる治に対し、ハルスはつんと言う。
「だって、この家の主人はわたしだもん。文句ある？」
「ある！」
「何？」
「この家の主人は、俺の倒産だ！」
「へぇ？隷の分際で、ご主人様を勝手に決めるのね？」
ハルスがそう言い終わり治が反論しようとしたと同時に、玄関のドアが勢いよく開き、治は玄関の壁に思いっきりぶつけられる。
「誰だよ！」
治が首を出しドアの外を見るが、誰もいない。
「まだやっちゃったかな」
ハルスはそれだけ言い、廊下のつき当たりにあるドアを開け居間に入る。
「おい、待てよ、靴！靴をぬげ！」
治は玄関のドアを閉め、ハルスを追って居間に入る。

治の家の居間は、壁は白く、北東のドアのすぐ右には台所の入口があり、その台所はカウンターで居間と接している。居間の中央には長方形の木の、正座くらいの低めのテーブルがある。西の壁の中央に黒い台に乗ったテレビ、それを挟む二段のビデオが並んでいる木の本棚が二つ、テレビの右の本棚の上に白い電話とテレビのリモコンがある。

ハルスはそのテレビの向かいにある東の壁のソファーに座っていて、居間のドアの治をにらんでいた。

「ねえ、早く料理しなさいよ。まったく、気が利かないわね」

「だから、何で俺がお前なんかに命令されるんだよ」

治が怒鳴るとハルスはソファーから立ち上がり、わきから先ほどの、ペン程度の長さの先のとがった木の棒をテレビに向ける。

「あれ、何」

ハルスにそう言われ、治は驚く。

「テレビだよ、そんなものも知らないのか」

それを聞き、ハルスはテレビを向いて、顔に不気味な笑みを浮かべる。

「エクスプロージョン」

突然、テレビが大きく爆発し、粉々になった。テレビの両横の本棚の上にも、テレビの乗っていた台の上にも、テレビの手前にも、その破片が飛び散る。

それを見た治は、さっきテレビを「何？」と言われた時の百倍以上は驚いた。次に、ハルスをまじまじと見つめる。さっきまでは怒鳴られながらもかわいいと思っていたのだが、今はどこから見てもそんな気持ちにはなれなかった。そればかりではなく、大きな恐怖を感じた。

「ご主人様に敬語を使わないと、こうなるのよ」

勝ち誇ったような顔をして、ハルスは治を見る。その治の顔は真っ青になっていた。

「あ…あ…」
口を開いても、それしか出てこない。ハルスは再びソファーに座り、治に命令口調で言う。
「さ、作りなさいよ、何でもいいから」
「だ…だ…だから、今のは一体……」
ハルスが治に棒を向ける。落ち着け。とにかく落ち着け。治ははあっと深呼吸してから、それでもまだ落ち着ききっていないとみえて、声をふりしぼっている。
「い…今のは一体、な、何ですか」
見知らぬ少女に命令されて敬語を使うのに抵抗はあったのだが、命令に従わなければ命に関わる。治はそう直感した。
治が、さっき深呼吸したばかりなのにまだ落ち着きを失ってしまっていることに気付き、もう一回深呼吸しようとすると、ハルスは平然と返す。
「魔法よ」
「はい？」
治は耳を疑った。
「で、これは使うための杖」
「はい？」
治は、今度は眼(め)を点にする。
「そんなことも分からないの？」
ハルスはものすごい剣幕で治をにらむ。
「ひっ！は、はい、知ってます」
「その顔は、知らないんでしょ」
さっきテレビの名を教えた時の治のようなセリフを、ハルスは吐く。
「し…知ってますよ、それくらい。でも実際に使っている人は見たことありませんし」
「ないの？どれくらい田舎者なのよ」
ハルスは疑っているようであった。

「隷なら誰でも知っているはずよ。知らない隷は一匹もいない」
「匹！？」
あ然とした顔の治に、ハルスは平然と言う。
「隷だから」
「俺は人間ですよ！」
しかしハルスは返事もせずに立ち上がり、杖をわきに収める。座っているままだとわきのポケットに入れにくいようである。ハルスは座ると、ちらと治を見る。
「隷、さっさとご飯を作りなさい」
「はっ、はい」
治は慌てて台所に入る。流し台の下の棚からフライパン、冷蔵後から卵を取り出し、フライパンの上で卵を割る。そんな治の姿を見て、ハルスは思いついたように言う。
「そうだ、隷にも名前があるんだった。で、あんた誰」
「零時治ですよ」
治はフライパンをガスコンロの上に置き、火をつける。
「レイジオサム？さっきも聞いたけと、やっぱり変な名前」
ハルスはそう放つ。
「これのどこが変なんですか？日本人として普通の名前です」
「とにかく」
ハルスは、粉々になった、テレビなるものをながめる。
「あんたは隷である以上、わたしの命令に従う」
「はい…はい！」
治は、何で自分がこんな女の子に命令されなければいけないんだというわだかまりを感じたが、それをむりやり抑える。
「はいは1回」
「はい」
しょうがないけどなんか怖いからとりあえず従うか。治はそう思いつつ料理を続ける。

## 第2話　mother continued

「できましたよ」
治ははあっとため息をつき、台所のカウンターに、皿に載せた玉子焼きを置く。
「何それ」
部屋の中央のテーブルの、ソファーの手前に正座しているハルスは、その玉子焼きをにらむ。治は台所を出て、カウンターに乗せたその皿をテーブルの、ハルスの前に置く。
ハルスはまじまじと、玉子焼きを見つめる。治が自分の斜め右に正座しているのに気付くと、ハルスは怒鳴るように言う。
「あっち行って」
「は、はぁ…」
治はおずおずと立ち上がり、ささっとドアの前へ行く。
「で？これは手でつかんで食べるの？」
ハルスに尋ねられ、治は箸を出し忘れていたのに気付き、慌てて台所に戻って引き出しから箸を二本取り、テーブルに戻ってそっと箸をハルスの手前に置く。治が腕を引っ込めると、ハルスは不思議そうな顔をしてその二本の棒をまじまじと見つめる。木の棒。ペンくらいの長さ、先がとがっている。これは杖ではないのか。魔法を使う時の杖ではないのか。
ハルスはその箸をつかんで治に投げる。ばしーんと治の顔に当たって床に落ちる。
「な…何をするんですか！」
「この黄色いのは、杖で食べるの？」
「違います！これは箸といいまして…」
「はし？」
「食べる時に使います」
「へぇ、要するに杖を箸と言ってご飯を食べているの？」

「違います。それより杖って普通おじいさんの使う…」
ハルスが杖を取り出し自分に向けているのに気付き、治は慌てて口を閉じる。
「もう遅い。えくす…」
ハルスは呪文を唱え始める。治はぐっと目をつぶる。
「たたいまー！！」
いきなりドアが開き、ハルスは詠唱を中断する。治も目を開け、ドアを見る。
「か…母さん、おかえり！」
緑色の長そでシャツを着ている母は、ドアを閉め、明るく言う。
「たたいまー！！…ん？」
母は、テーブルの前に一人の、ピンクの髪を背中の半分以上まで伸ばしていて、白いカッターシャツ、茶色のスカートをしている桃のように美しい目を持った少女が正座してこちらを見ているのに気付く。
「あ……」
治は困った。天然ボケの母が、いきなり居間に見知らぬ女の子がいたらどうするか、心配になった。母さんの出方次第では、最悪の場合……。治はぞっとして母に何かいいかけたが、それと同時に母が治の方を向き、明るく言う。
「治も成長したねぇ」
それを聞き、治は顔を真っ赤にする。
「違う！！いや、だから、これは……」
治が慌てて腕をブンブン動かしたので、母はいたずらっぽい顔をする。
「付き合っている女の子をこっそり家に入れるなんでね～」
「だから違う！！」
しかし母はそれを無視して腕時計を見る。
「あーらやた、もうこんな時間！？ドラマが終わっちゃう」
母は急いで、すでに爆発して粉々になったテレビの右の本棚の上

のリモコンをつかみ取ると、テレビの残がいに向けてボタンを押す。
「あれ、つかない」
母はあせった顔をし、何度もボタンを押している。
「だから、母ちゃん…」
治が呆れた顔で母に言うが、母は聞く耳も持たず、今度は電話の受話器を手に取り、番号のボタンを押す。修理会社にでも電話するのだろうか。母ちゃんやめろよ、と言いかけた時。
「誰、その人」
横からハルスの声がした。
「俺の母ちゃん、です」
治は恥ずかしそうに言う。
「はいもしもし、そちらはA〇Cテレビでしょうか、恐れ入りますが今の放送音声を流してください」
母の電話の声を聞き、治は慌てて母の方へ走る。まさか修理会社ではなくテレビ局にかけるとは、治も予期していなかった。
「はぁ？失礼ですが、番号違いでは？」
電話の声を聞き、治はばしーんと地面にこける。
「すみません、本当にすみません」
母は何度も頭を下げて電話を切ると、はあっとため息をつく。
「やれやれ、テレビ局探しも楽じゃないねえ」
治は立ち上がり、母に怒鳴る。
「だからって、適当な番号に片っ端からかけるなよ！」
「電話番号が分からないからしょうがないでしょ」
母の無責任な反論に、治はどう反せばいいのか分からなくなった。

「あんたの母なのね」
後ろからハルスの声がした。治が後ろを向かずにうなずくと、ハルスはぼそりと言う。
「……隷（しもべ）の母も隷」

それを聞き、治は顔を真っ青にする。後ろを向いて怒鳴る。
「それだけは勘弁しろよ！」
「敬語」
ハルスはその単語と同時に、手をわきに入れる。どうしよう。これに母も巻き込んだらさらにややこしくなってしまう。治はそう判断し、ハルスに言う。
「は…話の続きは別のところでしませんか？」
あせるような治のその口調に、ハルスは冷静に返す。
「どこで？」
「俺の部屋」

治の部屋は2階の廊下の奥のつき当たりにある。ドアを開けて左右に、天井まで届くほどの本棚、向かいに机と窓がある。右に押し入れ、左にペットがある。
治は、空っぽの机の上にランドセルを置くと、机の椅子に座る。それを見て、部屋に入りドアを閉めたハルスが、治を強い視線でにらむ。
「な…何ですか」
治が機械的な敬語で答えると、ハルスは怒鳴る。
「これが、隷のご主人様に対する態度だと思ってるの？まず、ドアを閉めるのは隷！椅子に座るのはご主人様！隷は床に座るの！」
「ですからさ」
治はため息をつく。
「これは俺の机ですよ？椅子ですよ？」
これればかりは所有権を主張する権利がある。治は自信満々にそう言った。
「何言ってるの」
ハルスはあっさりと一蹴し、治の方へ歩み寄る。
「隷のものは私のもの。私のものは私のもの」
「めちゃくちゃじゃないか！」

治が怒鳴ると、ハルスは椅子に座っている治の足をける。
「痛っ！！何すん…するんですか！」
「あら？その椅子はご主人様が座るのよ？どいて？」
ハルスは平然とそう放つ。
「さもないと……」
ハルスがわきに手を伸ばすと治はひるみ、ぴょんと兎のように立ち上がる。
「ちょっと」
真っ青になっている治に、ハルスは空っぽの椅子を指さして言う。
「隷のおしりの汚らわしい汚れを、ふいていただけないかしら？」
それを聞いて、流石の治も限界まできた。真っ青なその顔は、一気に真っ赤に変わる。体もわなわなと震えだす。
「な…な…何ですと！！」
治は我慢できなくなった。ある程度の怖さは感じたのだが、一度スカッとしてみたくなった。治は、ハルスの体に飛びかかる。が、ハルスは冷静にさっと杖を取り出すと、治に向ける。
「ガスト」

# 第3話　three years

強い突風が、治の体を紙切れのように壁に叩きつける。壁に強くぶつかった治の背中に激痛が走る。ハルスは、壁にもたれて座りこんで顔を真っ青にして自分を見ている治へ、一歩一歩歩み寄る。
「ああ…ち…近付くな！」
治は恐怖にかられていた。ハルスは冷酷にも治に杖を向け、冷たく言い放つ。
「嫌だったら、わたしの命令に従うことね」
「ひっ…はっ、はい！」
治は震えながらも立ち上がり、自分のハンカチで椅子の上をふく。

「こ…これでいいですか？」
治が機嫌を伺うかのようにハルスに尋ねるが、ハルスは冷たく怒鳴る。
「いいわけ、ないでしょう。隷（しもべ）のものは全て汚れているんだもの」
「じゃあ何でふけばいいんですか！」
「そうねぇ、……ん？　そのいす、もしかしてあんたがずっと使っていたの？」
「は、はい」
「それじゃ、もうこのいすはだめね。新しいのに取りかえてもらわないと」
　ハルスはそう言い、ドアの左にある本棚の前まで行く。
「でも俺、お金は…」
「お金ならわたしが持ってる。隷の鐚（びた）で買ったいすなんで汚れていて座れたもんじゃない」
「何だと！」
「あら、まだやられたいの」
　ハルスが杖をちらつかせると、治は引き下がる。

「床にでも座りなさい」
「は、はい」
治は床にあぐらをかく。
「これでいいや」
本棚の本を眺めていたハルスは、本棚に杖を向ける。一冊の本がひとりでに本棚から出て、表紙を上にして浮遊する。ハルスはぴょんとそれに座り、治を見下ろす。
「何？」
ハルスは不思議そうな顔をして、呆然とした顔で自分を見上げている治を見る。
「そ…それは、こっちのセリフです」
治がそう返すと、ハルスは注意する。
「まずご主人様から先にお伺いを立てるのが筋よ？そうでなくても、隷はご主人様の命令なしではしゃべってはいけないの。こんな基本的なことも分かってないの？」
「は、はい」
「それじゃ、聞くけと」
ハルスは、後ろに広がる本を、横目で見る。
「見たことのないような文字ばっかりね」
「それは日本語といいまして」
「つまりこの野蛮な地で使っている言葉なの？」
ハルスが、野蛮な、と付け加えたので、治はむっとする。
「ここのどこが野蛮なんですか？」
「杖でご飯を食べる」
ハルスのその言葉と同時に、ハルスの腹がまだ鳴る。
「あ……」
ハルスは恥ずかしそうにそっぽを向く。
「そういえば、玉子焼き食べてなかったっけ」
治が思い出してそう言うと、ハルスは治に怒鳴る。
「杖なんか出すから！」

「だからあれは杖じゃありません！杖を転用しているわけでもありませんから！」

「それより、スプーンとかフォークとかないの？」

スプーンって、ちゃんと知っているんだ。ハルスに尋ねられ、治はうなずく。

「ありますよ」

「じゃ、何で最初から出さないの」

「俺達は普通、スプーンで玉子焼きを食べませんから」

「そう？やっぱり野蛮ね」

ハルスはそう言い、ちらと左を見る。ドアの右の本棚の側面に、紙が貼られていることに気付く。その紙は全体が青いが、所々に緑の所もある。

「あれ、何」

「世界地図」

治が答えると、ハルスは杖を軽く振る。ハルスの座っている本が、世界地図の前へ動く。治はそれを呆然と、横から眺めていた。魔法と分かっていても、驚くものには驚くのである。

ハルスはそれを正面からまじまじと見つめていたが、驚いた顔をして治に言う。

「これ、本当に世界地図？」

「はい」

治が即答すると、ハルスは困ったような顔をする。

「こんなの、わたしの知っている世界地図じゃない」

「え？」

日本語という名の、読めない文字ばかりだから違うと感じたのかなと治は思った。

「形が違う」

「えっ？」

治は立ち上がり、ハルスの横に立って世界地図をながめる。なんでことない、いつもと同じ陸の形。……あっ、そうだった、世界地

図は他の国では、その国が中心に描かれるんだっけ。しかも南半球では、地図はここと上下逆様になっている。治は世界地図の画びょうを外して床に落とすと、地図を逆様にしてハルスに示す。
「どう？」
しかしハルスは首を横に振る。
「これ……、本当なの？本物なの？本当に世界地図なの？」
「本当ですよ、嘘だと思ったら他のも見ますか？」
「ううん……」
ハルスは首を横に振る。その桃の目から、涙が流れ出しているのに、治は気付いた。
「おい……？」
治が心配そうに声をかけると、ハルスは本から降りる。同時に本も下に落ちる。ハルスはゆっくりと机の方へ歩み寄り、さっき自分が「汚れていて座れない」と言った机の椅子に座る。顔はうつむいていた。えっく、えっくと、泣き声がもれていた。そんなハルスを、治は見つめていた。
「どうしよう……」
ハルスがそう言いだすと、治は地図を丸めて手に持ち、ハルスの手前に立って尋ねる。
「家の場所が分からないのか？」
「ちが…ちがう、ひっく…」
「ど…どうしたんですか？」
さっきまではあんなに強気だったのに急に泣きだしてしまったハルスを見て、治は、女の子なんだなあと思った。泣き顔がちらりと見えた。涙をみだりに流したりせず、目もとを赤くしてしゃっくりしている程度のその顔から、上品さを感じた。この女の子は素もかわいい。思わず抱きしめたくなったのだが、後で機嫌の直った時にギタギタにされるのかなと思うと、手が出せなかった。
「えっく、えっく、ひっく…、こ、ここがまさか…」
ハルスはしゃべりだすが、再びそれは泣き声に戻った。治はそん

なハルスを黙って見守るしかできなかった。
「わたしと別の世界……」
　それを聞き、治は目を点にする。
「それ、どういうことですか？」
「本で読んだ事がある」
　ハルスは、手を顔からゆっくりと離す。
「わたしたちの世界とは違う世界が存在するって…」
「えっ？」
「作者の実体験って書いていたけど、わたしは信じなかった。でも、まさか本当にあるなんて……」
「お、落ちつけよ、とりあえず帰る方法はあるんだろ？」
「それが…、３年に１度しか使えないらしいの」
「はい？ち…ちゃんと帰れるんだろ？」
「うん、でもわたしがこうしてここにいるってことは、理論的にはこれが１年目と言ってもいい…」
「え…？」
　治は複雑な気持ちになる。３年間ずっとこの女の子と一緒にいる自信はなかったのだが、かわいいハルスの顔を見て我慢する自信はあった。
「どうしよう…帰れない…３年も……」
「とりあえず、ちゃんと帰れるんだろ？」
　治のその確認に、ハルスは右手をおでこに当て、なにやら一生懸命な顔をする。お寒いは、さっき床に落とした４つの画びょうを拾おうと思ったが、隷としてではなく倫理上動いてはいけないような気がした。目の前の女の子が、深刻な状況に追い詰められているような、そんな感じがした。
　ぼたり、ぼたりとハルスの左足から血が垂れてくる。治は嫌な予感がして後ろを向く。ドアの前に落ちている画びょうが、４つあるはずが３つしかない。さっきハルスが本から降りた時に踏んでしまったのだろうか。これは足の痛みも感じないほど深刻なのか。もっ

とも、隷をさせられるであろう俺の方が大変なのには変わりはないが。治はそう思い、再びハルスの方を向く。ハルスは、治の顔をちらりと見て、言う。

「わからない。忘れた」

ハルスがあせった声を出すと、治はえっとなる。ハルスは顔を上げ、治の目をじっと見つめる。その顔は真っ青になっていた。目元が赤い。涙がハルスの頬を伝い、ぼたりと落ちる。

「帰り方を……、忘れたかもしれない」

# 第4話　school bought

「う…嘘だろ」
そう言う治の声は、震えていた。帰る方法を忘れた？ということは、帰る方法が分かるまでずっとこの暴力的な女の子と一緒に暮らさなければいけないのか？冗談じゃねえ。３年か、６年か、９年か、……一生。
「俺も探すの、手伝うよ」
手伝う。全力で手伝う。一生の苦しみを考えれば短い。
「あ…ありがとう……！」
ハルスは涙をぼろぼろ流し、治に抱きつく。ハルスの大きな泣き声が聞こえてきた。
「うわーん……」
泣いているハルスを見て、治は、こうやって見るとかわいいところがあるんだな、と感じた。そう考えると、ハルスの天然のかわいさが思い出される。かわいい。とてつもなく、かわいい。話の流れに乗ってハルスを強く抱きしめようと思ったが、後で殴られるのが嫌だった。
「……そういえば」
ハルスは思い出したように言う。
「あの本には、ご飯を杖みたいなもので食べる国があって、そして奴隷は認められていないって…」
「そっか…」
「だから、わたしも、隷扱いするのをやめる」
ハルスは顔を見上げ、治の顔を見る。その顔が、先ほど回想していた顔よりもかわいかったので、治は顔を真っ赤にし、それをハルスに見せまいと慌ててそっぽを向く。
「落ち込んでばっかりもいられないわね」
ハルスは明るくそう言い、立ち上がる。

「痛っ」
ハルスは足元を見る。左足から血が流れていた。足の裏を見ると、かかとに金色の丸いもの（画びょう）がささっていた。ハルスの顔が急に真っ赤になる。ハルスは、治の顔を、鬼に勝る怖さでにらむ。それを見て、治の顔がだんだん青くなってくる。
「隷ーーーー！！」
「ひぃーーーー！！」
魔法と殴打を以ての一人の少女の打擲は、日没まで延々と継続した。

だんこぶだらけで、顔も妙に膨らんでいるその男の子がふらふらと居間に入ってきたのは、母が一人で食卓にご飯を並べ、先に食べ始めていたところであった。
「部屋には、ご主人様を先に入れるのよ！」
治の尻を、ハルスはける。ハルスにけられ、治は転ぶ。
「まったく、いすに罠を仕掛けるなんで…」
罠なんかじゃないのに、と治は心の中で反論するが、口に出したらまだ殴られる。というか殺される。
「あら、あなたも食べるの？」
テレビ（のあったところ）の手前に座ってご飯を食べていた母が、向かいに立っているハルスに尋ねる。ごはんは、母と向かいの二人分しかない。
「あ、はい。……この家のお母さまですか？」
ハルスは、母の向かいの食事の前に、正座する。治はふらふらと立ち上がり、ハルスの後ろのソファーにどさっと座る。
「はい、それが何か？」
母はハルスの後ろのソファーの治を、心配そうにチラッと見る。
「お父さまはおられますか？」
「アメリカに出張中ですよ」
「そうですか、それでは……、一つお願いがあります」

ハルスはうつむく。
「その…、簡単に言うと、帰る場所がないんです」
「まあ…」
「それで、それで、その……、この家に居候させてください！」
ハルスは力強く言う。
「いいですよ」
母は即答した。こんなものを即答するのかよ母さん、と治は思ったが、そんな治の表情を無視して母は続ける。
「名前、まだ聞いていませんでしたね」
「ハルスです」
「あら、外国人さん？自分の名前をきちんと全部いえるかしら？」
「はい、ええと、ハルス・シーラントです」
「あら、日本語がお上手ね。自分の国も言えるかしら？」
それを聞いて、治はしまったと思った。別にハルスに居候してほしいとかそんなものではないのだが、しまったと思った。ハルスから見るとここは異世界。しかも日本以外の国名は全く言っていない。世界地図にないような国名を言われたら、話が混乱するような気がした。
「モルデス公国です」
「あら、そう」
母があっさり流したのを見て、治はえっとなる。
「いくらでも手伝いますので、どんどんこき使ってください！」
「いいのよ。わたしもちょうど、娘がほしかったところだから」
母はにっこりとそう言い、立ち上がる。
「ハルちゃんのごはん、用意しておかないとね」
「あ、いいです」
「え？」
「治のご飯はいりません」
「ええっ！？」
治は、体中の痛みを押して立ち上がる。

「俺、まだご飯食べてないんですけど？」
「いらないって」
ハルスが言うと、母はうなずく。
「そう、それじゃ二人で食べましょうね」
「おい！」
治は突っ込むが、ぎろりとハルスが自分を見ているのに気付き、口をつぐむ。
「部屋に戻りなさい」
ハルスが怖く言うと、治はおびえて早足で居間を出る。
「お姉さんみたいね」
母がにっこりと言う。くすくすと笑っていた。

「やれやれ……」
部屋に戻った治は、空っぽのおなかをさすりながら、ハルスに対する愚痴を容赦なく放っていた。
「全く…、何なんだよあの女。俺の家の前に勝手に倒れて勝手に家に入ったじゃないかよ。それが何だよ、あんな傲慢な態度は。鼻につく」
やれやれ、とため息をついて、何かしないと腹がなくなりそうな気がしたので、ランドセルから宿題を取り出す。
「くそ・・・くそっ！」
治が悔しそうにそう言うと同時に、ぼきっと鉛筆が折れる。
「あっ」
治は机の奥から鉛筆削りを取り出し、鉛筆を削り始める。手動の鉛筆削りで、後ろの取っ手を回して削るタイプである。
治はため息をつく。何年も？何年も今日みたいな生活？冗談じゃねえ。考えるだけで死にたくなる。第一あれは…あの画びょうはわざとじゃねえ。なのになんで俺の弁解を聞こうともしないんだよ。手伝いをしないのは兎も角、あんな傲慢な居候がこの世のどこに存在するのだろうか。

宿題を終えたので、明日の準備にとりかかる。明日？という言葉が頭に浮かんだので、治の顔はぱあぁっと輝く。そうだ、学校だ。学校までもあの女はついては来ないだろう。つまり、学校は天国だ。治は、小学1年生の入学式の朝よりも小学校に期待を膨らませていた。

その時、ドアのノックがした。

「どうぞ」

ドアをノックするという事は、少なくともハルスではない。思った通り、入ってきたのは母であった。

「母さん、ちょっとお出かけに行くからね」

「はい？」

治は目を点にする。母のこの時間帯のお出かけは、今までで初めてなのである。

「何しに行くの？」

治がそう尋ねると、母はふふっと笑う。

「ハルちゃんの学校の準備よ」

「はい？」

治は悪寒がした。治の事情を全く理解していない母は、明るく続ける。

「さっき話したんだけとね、ハルちゃんがここにも学校あるのって聞くから、あるよって答えたの。それでハルちゃん、治と同じ学校に行きたいって。すっかりラブラブね、あんなかわいい女の子と」

治は真っ青になったが、母は治の表情も見ずに続ける。

「これからランドセルやら買いに行くのよ」

「あ、でも戸籍は？」

治は内心にやりとしながら言ったが、母は少しも慌てない。

「いいのよ、わたしの隠し子としてなら分かってくれるし」

「分かってくれるか！」

治は突っ込む。

「第一、ハルスって何だよ？外国人だろ？」

「外国籍でも学校には入れるわよ」
「でも、モルデスって国は…」
「あるわよ、アフリカのあたりに」
「あるか！世界地図を見ろ！」
「あるわよ、とりあえず、それじゃ行ってくるね」
母はそう明るくいい、ばたんとドアを閉める。
「あ…おい！」
治はいすから立ち上がる。その顔は真っ青になっていた。
「い…一体これ、何がどうなっているんだよーーー！！」

# 第5話　can't get

流れ始めた。
その街に流れ始めた。
啼き声が、その街に流れ始めた。
小鳥の啼き声が、その街に流れ始めた。
朝。
夢から、醒める。
人は、夢を見る生き物である。
それは、仕方がないとして。
悪夢だ。
実に悪夢だ。
そう心の中で叫ぶ零時治は、ぱちくりと目を開けていた。
ここは、治の部屋。ハルスは、ベッドで寝ていた。それに対し、自分は部屋の隅の床の上に追いやられていた。固い。床が固い。固くて、治には耐えられなかったが、ハルスの暴力を考えると、それは仕方のないことであった。治は立ち上がり、ベッドを見る。ハルスはまだ寝ていた。その寝顔は、遠くから見ても、結構かわいらしかった。ハルスはかわいいんだな。治の足が、ふらついた。
いけない。治ははっと我に返る。そうだった、今日は、ハルスに学校へ連れて行く・・・。ハルスと一緒に登校・・・。そう考えるだけで憂鬱になる。治ははあっとため息をついて下を向いていた。
「あっ！」
治の顔が急に輝く。そうだ、逆に言えば、ハルスは学校への道が分からない。治は急いでたんすから服を出し、着替える。さっさと、さっさと、さっさと。
治は机の上の黒いランドセルをぶん取り、背中に負って静かにドアを閉めると、そそくさと下へ落ちるように降り、居間へ駆け込む。居間では、母が料理をしていた。

「パンは？」
治がそう尋ねると、母は首を横にふる。
「突然、どうしたの？」
母に尋ねられるが、治は返事もせず、冷蔵庫の中を物色してりんごを一個取り出すと、走って居間から出る。
「あ、ちょっと待って！」
母が治を呼び止めるが、その頃には家のドアが閉まっていた。

「はぁ…」
治は、いつもの通学路をぶらりと歩いていた。自然と笑みがあふれるようであった。そして、治はついにたまらず、一笑した。
「はは…はは…ははっ！はっはっは、はははは！！」
「こら！！」
いきなり怒鳴り声が聞こえる。昨日聞いたばかりの声。治は笑いから一転、顔を真っ青にする。そこにいたのは、犬を連れてきたマナーじいさんであった。
「あ…マナーじいさん、おはようございます」
治は慎重に発声する。
「朝早くから笑うな！周囲に迷惑ではなかろうか！！」
案の定、叱られた。しかし、そんな時でもこっちには秘密兵器があるのである。
「西郷隆盛の真似ですか？」
案の定、マナーじいさんは顔を崩し、いい気してそこを立ち去った。治はほっとし、改めて足を進める。

「ふぁあああ…」
ハルスはベッドから上半身を起こし、両手を上へ伸ばす。ピンク色の髪をしわくちゃに、背中まで伸ばして。
「治」
ハルスはベッドから立ち上がると、治の名を呼ぶ。

「……ん？」
ハルスは、治の寝ているはずのその部屋の隅に、治がいないのに気付いた。
「治？」
見てみると、机の上に、治のランドセルがない。
「先に行ったわね…、まあいいわ、お仕置きだから、例のおばさまと同じように」
ハルスはそうつぶやき、ベッドの下に置いてあった、というか落ちてあった着替えを拾う。
ハルスが昨日着ていた服は、母が洗濯してくれた。今日はハルス、母のお下がりの服を着るのである。

治は、通学路を歩いていた。
「あ、零時君。」
T字路の向かいから、一人の少女が歩いてくる。
「あっ、羽生、おはよう」
治はそう言い、左に曲がる。
「ちょっと！人は呼び捨てにしちゃいけないんでしょ！」
羽生はそう怒鳴り、治を追って治の横へ回る。
「だいだいあなたは、昔からそういう性格で、」
「はいはい、わかったから顔を近付けるなよ」
吐息のかかる距離で、羽生は、治の顔に迫っていた。
「いいえ！いつものことだから、怒っているの。」
「だからといって、怒りすぎじゃないか」
「違う！」
羽生は、治の行く先に回る。
「どけよ」
「嫌。」
羽生はそう言い、治のほっぺたをぱちこんと叩く。
「痛、何すんだよ」

「あなたがきちんとしないから、イライラしているの。」
「はいはい、羽生の几帳面さにはうんざりだよ」
治はそう言い、羽生の右へ回る。しかし羽生は右へ動き、治の前を阻む。
「何やってるんだよ」
後ろから声がしたので、治は振り向く。
「あっ、前田、おはよう」
後ろから声をかけたのは、前田であった。前田は、治の所へ歩み寄る。
「羽生」
前田は威勢のある声で一喝する。
「何よ。」
羽生はむっとした顔で応対する。
「お前は、些細なことで怒りすぎだ」
「な…何ですって！もう一度言って御覧なさい。」
「お前は、些細なことで怒りすぎだ」
「あ？」
羽生は、前田に顔を押し出す。前田は後退りをするが、羽生はさらに前田を、気迫で押す。
「羽生！」
治が怒鳴るが、羽生の眼中に治はいなかった。

「おはよう、おばさま」
ハルスは居間に入り、居間の中央のテーブルの床に正座している母に言う。
「おはよう、ハルちゃん、あのね」
テーブルの上には、朝ご飯が並んでいる。しかしそれはなぜか二人分のみであり、少しも食べられた跡はない。ハルスは不審に思い、母の向かいに正座すると、尋ねる。
「治の朝ご飯は？」

「帰ってから食べるって」
「そう…」
ハルスがそう答えると、母は続ける。
「ハルちゃん、あのね、わたしのこと、お母さんと呼んでもいいのよ」
「えっ？」
「だって、おばさまと呼ぶと、秋●様の事をさしているみたいでしょ？」
「ああ…そうですね。お母様と、」
「さんでいいのよ」
「はい、お母さん」
ハルスがそう答えると、母は両手を合わせる。
「いただきます」
「ねえ、お母さん」
母の仕草を不思議に思ったハルスが、母に尋ねる。
「いただきますって、何ですか」
「あら、まあ」
母は、にっこりと笑む。
「いただきますはね、このお箸に、自分のつばや口の中の汚い物を付けさせていただきます、のいただきますなのよ」
その答えは根本的に違う。（食前食後の皆様、申し訳ありません）

「そうですか、なるほど、ありがとうございます」
ハルスはにっこりと笑み、両手を合わせる。
「いただきます」

ハルスは玄関で、靴を履こうとしていた。
「あらまあ、どうしたの」
いつになっても立ち上がらないハルスを後ろから見て、心配になった母が後ろから声をかける。

「靴のかかとが、入らないんです」
「あらまあ、そういう時は、孫の手を使うのよ」
「孫の手…ですか」
「でも」
母は残念そうな顔をする。
「ハルちゃんはまだ若いから、孫、いないんでしょ？今使えないのは残念ね」
その孫の手は違う。
「そうなんですか」
「でも、かかとに指を入れたら、入るわよ」
「はい、ええと…入った、ありがとうございます」
ハルスはそう言うと、立ち上がる。
「いってきます」
閉まるドアを見て、母は不審そうな顔をする。

ハルスは、家を出て、足を進めていた。
「今日から学校ね。まったく、初日から治をお仕置きなんで、ついてないわ」
ハルスはため息をつき、適当に、それっぽい道を歩き回る。
「そこのかわいい娘ちゃん」
いきなり後ろから声をかけられ、ハルスは振り向く。ちゃらちゃらしている男の人が立っていた。
「なあ、俺と一緒に映画でも見ないか？」
「あなたには、興味ありません」
ハルスがそう一蹴すると、男の人は泣き出す。
「うっ…うっ……、お、俺に従わない人は…、こうだ！！」
そう言うと、男は脇から、刃物を取り出してハルスに向ける。その手は震えていた。
「うっ…」
ハルスの顔は青ざめた。その刃物、全体が真っ赤になっていた。

ぼたりと、赤い液が道の上に一滴、落ちる。
「うう…」
ハルスは脇へ手を伸ばす。ない。杖がない。しまった、忘れた。昨日の服の中に入れっぱなしだ。
ハルスは、向きを変え、一目散に逃げ出す。走る。走る。走る。走る。走る。そして、ちらりと後ろを見る。誰もいない。
「はぁ、はぁ…」
ためいきをつき、ハルスは辺りを見回す。高いビル。高いビルが、ずらりと並んでいる。なんか怖そうなおじさんがたくさん、ハルスの周りをひっきりなしに歩いていた。
「えっ……」
ここはどこ。ハルスは、不安に襲われた。
ここは、一体どこなの。
そんな…もしかして、わたし———・・。
ハルスの顔は、青ざめる。

# 第6話　ａｒｒｉｖａｌ　ｓｃｈｏｏｌ

やたらその状況を回避したい、その回避の仕方が問題なのです。
・安倍さんの辞め方
・ＮＨＫ
・中国五輪前
・あで始まる例のおばさま
今回は、そんな問題大ありの回避の仕方を実行してしまった少女の話です。

「ああ…」
ハルスは、呆然としていた。
辺りは、スーツを着たおじさん達がびっしり。朝ということもあり、さらにびっしり。高いビル。青空なんで、上を見ないと見えない。前には、なんか「Ｊ●　姫娚駅」と書かれた駅が見える。
どうしよう。いや、違う。違う。絶対違う。これは迷子なんかじゃない。大丈夫。ハルスは自分にそう言い聞かせる。
「どうしたの、もしかして迷子？」
後ろからいきなり女の声がし、ハルスはビクッと振り返る。年配の女の人は、にっこりとハルスに微笑んでいた。
「ち…違います、わたし、迷子なんか」
「そう思うのが、典型的な迷子なのよ」
「そんな…違います」
「ふふ、典型的ね」
年配の女は吹きだす。ハルスはむっとする。
「ごめん、ごめん」
年配の女は笑いながら謝る。
「とりあえず、おまわりさんに行こうね」
「嫌です」

ハルスは年配の女の股間をけり上げ、だっと駆け出す。
「あ、ちょっ…」
年配の女の人はよろりと立ち上がる。
「どうした！」
後ろから男の怒鳴り声。
「あら、あなた」
年配の女は後ろを振り向く。年配の男が立っていた。
「公子、大丈夫か！」
「大丈夫ですわ、このくらい」
「誰にけられた！」
「まあ、まあ……」
男はいきり立っていた。
「大丈夫だから、ね」
「ならん！警察に被害届けを！」
「それはあまりに大げさでは…それより、学校に遅れるではありませんか」
「むう…届けるのが先だ！」
「まあまあ……」
女は何やら、呆れた表情をしていた。

「まったく、これだからあなたは！」
6年2組の教室に入った後も、羽生は前田に頭ごなしに怒鳴っていた。前田はすっと目をつぶっていた。
「なあ、そろそろいい加減にしないか」
教室にいた池田が、教室の入り口で前田の耳に喝を送っていた羽生の耳を引っ張る。
「痛い！童女に何をするのよ！」
羽生が怒鳴るが、池田はそれを無視して前田を教室の中へ引っ張る。
「ねえ、ねえったら！」

「うるさい」
池田は、羽生をにらみ付ける。
「ひぃ………。」
羽生はそのにらみ顔に怖さを感じたのか、退る。
「やれやれ…、羽生はいつもうるさいからいけないな」
「だからといって、何よ。」
羽生が抗議するが、池田はさらににらむ。
「うるさい」
教室の隅の机に座って窓の外をぼんやりと眺めていた長谷川が、いつの間にか羽生達を見つめていた。
「あ……、うん」
羽生はうなずく。
「やれやれ……」
治はほっとため息をつく。

商店街のみゆ●通りを、ハルスはとぼとぼと歩いていた。
「どうしよう……」
うつむいていた。周りには、通勤途中の学生たち、おじさんたちが歩いていた。
「……ん？」
うつむいていたハルスは、地面に落ちている木の短い棒に気付いた。ハルスはそれを拾い上げ、じっとみつめる。なり、その棒を真上に向ける。
「テレポート」
ハルスの足を中心とした、半径３０センチの円形の、金色の魔法陣が出現し、ハルスの周りは白い光に包まれる。周りの人たちは、眼を丸くしてその地点を囲んで見ていた。
やがて消えた白い光の中に、いたはずの少女がいない。そこらじゅうは、騒ぎになった。

教壇の周りで、治と前田の二人は、談笑していた。
「まったく、あきないわね、あの二人も。」
教室の隅の机に座っている長谷川の横で羽生は語りかける。しかし長谷川は全く返事もせず、こくりとうなずいただけであった。
「おはよう」
教室に、一人の少女、岡田檸檬が入る。
「あ、岡田、おはよう」
教壇で前田と話していた治は、にっこりと横を向く。
「おはよう」
岡田もにっこりとそう答え、自分の席へ歩いて行く。
「いいなあ、治。あんなかわいい女の子と幼なじみで」
「だからさ、違うんだよ」
治は恥ずかしそうに、顔を赤らめる。
その時。
「あ……」
窓の外をぼんやり眺めていた長谷川が、ぼそりと声を出す。
「どうしたの？」
羽生はそう言い、窓の外を見る。
「あっ……。」
校庭の中央で、たくさんの人だかりの輪が出来ていた。その輪の中央にいるのは、桃のような髪を背中まで伸ばしている、子供であった。
「あの人はもしや……。」
羽生はそう言い、かけだして教室を出る。
「あ…おい！」
羽生の異常さに気づいた前田が声をかける。治はとっさに校庭の外を見る。
「あっ……、ハルス！？」
「えっ、ハルス？」
廊下側の席の岡田も窓へ駆け込む。

「あ……、本当だ、ハルちゃん」
「えっ？」
治は、左の岡田を見る。
「もしかして、ハルスを知ってるの？」
岡田はこっくりとうなずく。
「なつかしい……」
「……何でだ」
治はそう言い、くるりと向きを回転して教室を飛び出す。
「えっ？あ、待ってよ！」
岡田も、治の後を追って教室を飛び出す。
「まったく、めんとくせーな」
前田はどさっと自分の席に座ると、ちらりと斜め後ろを見る。長谷川が、窓の外を今もなおぼんやりと眺めていた。

「ハルス！」
人だかりを掻き分け、治は人だかりの前面まで来る。
「あっ、治」
ハルスはそう言い、治の方へかけよると、ぎゅっと治を抱き締める。
「な……」
治は顔を真っ赤にする。
「何すんだよ、人の前で」
「だって」
ハルスはさらに、強く。抱き締める。周りの生徒達は、白い目でそんな二人を見ていた。
「うっ……」
治は、事の気まずさに気付いていた。
「なあ、ハルス、離せよ！」
「だって、みんな、わたしに変な質問ばっかりするもん」
「変な質問って、どんなだよ」

「どうやってここに来たんだよ、って」
「えっ？」
治は眼を丸くする。
「当たり前よね、方法なんで誰でも知ってるのに」
「ま、まさか……」
治の額は、汗ばんでいた。治はばっとハルスを引き離すと、ハルスの手をぎゅっと引っ張り人だかりを掻き分け、校舎に入り、土足のまま一階のトイレへ駆け込んで、個室に入って鍵をかける。
「なあ、ハルス！もしかして魔法を使ったのか！」
治が怒鳴ると、ハルスはむっとした顔をする。
「なんなのよ。魔法を使っちゃいけないの？」
「ああ！この世界には魔法がないから、少しでも不思議なことが起こったら大騒ぎだよ！」
「それじゃ、不思議じゃない魔法って、何なの」
「魔法は全部、不思議だよ！」
治は、はあっとため息をつく。
「魔法なんでたくさんの人の前で使ったら最後、最悪の場合一生普通の生活ができなくなるんだぞ！」
「えっ？」
ハルスは、驚いた顔をする。治は再度、ため息をつく。
「お前、そんな事も分からないのか」
お前、と聞いて、ハルスははっと我に返る。
「い、今、わたしのことをお前って……」
ハルスの顔は、にっこりとしていた。
「あ……」
治の、先ほどの羽生との口論での強気は、吹っ飛んだ。
「ご主人様って、呼んでくれるんじゃなかったのかな？」
治は顔を真っ青にする。
「でも、ちょうど杖を家に忘れちゃって」
治はほっとする。

「でも、ちょうど代用品を見つけたから」

えっ？

ハルスはにこにこして、地面から拾った棒をポケットから取り出してみせる。その笑顔は、異様にかわいかった。

悲鳴。

# 第7話　new encounter

「どうしたの？」
驚く岡田檸檬をよそに、体中を真っ赤にしてふらふらと、治は教室に入ってきた。
「どうした！？」
前田も駆けつけるが、治は一言もしゃべれない。
「禁則事項を破ったのよ」
治に続いて教室に入ってきたハルスが、平然と言う。
「誰だよ、お前」
前田がハルスに尋ねる。
「ハルスよ」
ハルスはつんと言う。
「ちょっと！ハルちゃん！治君に何をしたの！」
檸檬がハルスの肩をつかんで、体を揺さぶる。
「禁則事項を破ったから、罰を与えたの。問題でも？」
「大ありよ！」
檸檬はそう怒鳴り、ハルスを突き飛ばし、今度はしゃかみ、地面に倒れた治に話しかける。
「大丈夫、治君？」
しかし治はうつぶせのまま答えない。
「治君！」
「ハルスとかいったな？お前、何をした？」
前田がハルスに迫ると、ハルスはつんと返す。
「隷（しもべ）として、禁則事項を破ったの。それだけ」
「はぁ！？隷？」
「そうよ」
ハルスはそう返し、うつぶせの治の背中に足を乗せる。
「ちょっと、やめて！」

檸檬が叫ぶと同時に、羽生がしゃかんでいる檸檬の背後に立つ。
「ハルちゃん。」
「久しぶり」
ハルスはそれだけ答え、さらに治の背中を強く踏んづける。
「知り合いか？」
前田が羽生に尋ねる。羽生は黙ってうなずく。
「治を保健室へ連れて行くぞ！」
前田が叫ぶと、羽生が怒鳴る。
「保健室ってレベルじゃないでしょ！」
「でもさあ、とりあえず、だし、まだ先生も来てないし、へんてこ女も来てるし、保健室だろ」
「へんてこ女？」
ハルスが前田の方へ歩み寄る。
「や…やめろ」
うつぶせの治がかすれ声で言う。
「治君はしゃべらないで！」
檸檬はそう言うと立ち上がり、羽生に言う。
「私が運んで行きます」
「あたしも、運んで行く。」
羽生はそう言って、それからハルスに怒鳴る。
「いい加減傲慢な態度はやめなさいよね！」
「傲慢？どういう意味なのよ！」
むぎーっと、羽生に歯をむくハルスを、前田は腕で固定する。
「ちょっと、何よ！離しなさいよ！」
「それじゃ、お願いね。前田君。」
羽生はそう前田に言い、うつぶせになっている治の上半身の下に手を入れる。それを見た檸檬も、下半身に手を入れて持ち上げる。
「いってくるわ。」
羽生はそう言い、檸檬と共に、是が開けてくれた教室のドアから教室を出る。すれ違った是は、呆然と、真っ赤になっている治を見

ていた。
「ど…どうしたんですか……」
是はドアをゆっくり閉めると、前田に尋ねる。
「何でもねえよ。お前は知らなくてもいい」
「そ…そうですか、ごめんなさい」
是は気弱くそう言い、自分の席へ行く。
「ぎぎぎぎっ、離しなさい！！」
一方のハルスが前田の腕をつかんで、噛む。
「痛っ！」
前田が思わず腕を離すと、ハルスは一目散に教室のドアを蹴る。
「うん？」
ドアを蹴ろうとしたほぼ同時に、ドアが開き、夜久の顔に靴の裏が命中していた。
「んむ」
夜久はぴたりと動じないが、ハルスはその夜久の体を押しのけ、教室を出る。
「おはよう、夜久」
前田はそう言い、悔しそうに足を踏む。
ずるっ。
前田は地面に滑って転ぶ。
「あっ……」
夜久はびっくりして、転んだ前田の体の周りを見る。
「血……！」
前田は辺りを見回した。周りには、血が広がっていた。治の血。
「起こる……！これから…、何かが起こる……！」
夜久は、いとも恐ろしそうにそう言う。
「はいはい、もう起こりましたから。福本●行みたく言わなくてもいいから」
「何が？」
夜久は、ポケットから大量のお札（ふだ）を取り出す。

「いや、そのレベルじゃないから！」
前田は立ち上がろうとすると、再度滑った。それを見て、ぶっと笑った少年が、一人。謎十であった。
「謎十！笑うな！」
前田が怒鳴るが、謎十は何も言わずにドアを閉めて教室に入る。

治の家で、治の母はのんびりとお菓子を食べながら、テレビのリモコンのボタンを押す。
「あれ、つかない」
何度も押そうとするが、テレビはつかない。いや、そもそもテレビの存在自体がないのである。
「どうしよう……」
母はおろおろと、テレビの横の電話で、例によって適当な番号を押して電話をかける。
「はい、もしもし、こちら一ノ谷小学校です」
電話に出たのは、一ノ谷小学校の先生であった。
「あ、すみません、零時の母です。突然ですが、あなたはテレビが好きですか？」
「はぁ？」
先生は職員室で、真っ白になっていた。
「どうしたんですか？」
別の先生が尋ねるが、先生は首を横にふって、それから電話に言う。
「すみません、何が言いたいのでしょうか？」
「はい、つまり、あなたはテレビのリモコンですか、ってことです」
「おっしゃっている意味が分かりません」
「すみませんが、私の家のテレビが壊れているのですが、直していただけませんか？」
「無理です」

「何でですか？テレビのリモコンなら、テレビを直せるはずです！」
「おっしゃっている意味が分かりません」
「てれ…」
その母の返事が続かないうちに、先生は電話を切った。
「一体どなたからの電話でしょうか？」
別の先生が尋ねると、先生は答えに迷う。
「えー……、保護者からの電話です」
「内容は？」
「ええと……、あまりにも理不尽なので、お答えできません……」
「教えてくださいよ」
「答えられないものは答えられないんです」
そう言った先生は、職員室を飛び出す。
「あ、ちょっと」
別の先生は、その先生を追う。

保健室に、ノックの音。
「どうぞ」
保健の先生、綾崎よし子がそう言うと、「失礼します」と言って、治を抱いた羽生が保健室に入ってくる。その治の姿を見て、綾崎先生は真っ青になる。
「保健室で、なんとかできないでしょうか？」
羽生が尋ねるが、綾崎先生は動揺していた。
「そ…それは、保健室ってレベルじゃない！」
「そうですか？」
「と、とにかく１１９番してくるね」
「そうですか？保健の先生、治せないんですか？今すぐ。」
羽生のそれを聞き、綾崎先生の目が変わった。綾崎先生は、保健室の隅の机から静かに立ち上がる。
「知っているのね……、あれを」

「はい。」
羽生はそう言い、気を失った治の容態を、保健室のベッドまで持っていって下ろす。
「ちなみに、属性は」
綾崎先生はそのベッドまで行くと、静かに羽生に尋ねる。と、保健室にもう一人の少女が入っているのに気付く。綾崎先生ははっとする。
「いえ……、何の話でもありませんわ」
「いえ…、私も知っていますわ」
檸檬はそう答え、保健室のドアを閉める。
「まったく……、なんでこんな時代になってしまったんだろう……、あれの事は誰にも言ってはいけない……」
檸檬がぼやく。
「しょうがないわよ、マスコミさえいなければ。」
羽生もそう言い、そして綾崎先生に言う。
「あたしの属性は、水、木です。」
「あら、お利口さん、きちんと自分の属性を言えるのね」
綾崎先生はそう言い、そして杖を取り出し、治に向ける。

保健室の、治のベッドの下に、一人の男は隠れていた。
「…………」
その男は、黙って、横の6本の足を見つめていた。手には、杖を握っている。男の目の前にある小さな魔法陣に手をかざし、念ずる。テレパシーである。
”背後から襲え”

# 第8話　bloody room

”背後から襲え”
その念を受信した複数の人々は、ごくりとつばを飲み込んだ。
”合図があるまで待機せよ”

保健室は、入って右側にベッドが二つ置かれていて、右後ろ隅に先生の机があり、左には身体測定用の器具が置かれている。２つのベッドはいずれも薄い水色のカーテンで仕切りがされており、ドア側のベッドに治は寝かされていた。
血みどろの、その血を、ベッドまでしみこませて。
「ヒーリング」
治の体中の、傷口は次々と立ち直ってゆく。しかしすでに出た血は、治癒の魔法では当然消えるものではなく、目で見ただけでは治ったかは分からない。が、保健の先生が大丈夫な顔をするなら、大丈夫なのだろう、恐らく。
「さあ……、このまま安静にさせて」
「はい。」
羽生はうなずく。
「治君……」
檸檬は心配そうに、血まみれの治を眺める。
「さあ、授業が始まるわよ。」
羽生はそう言い、檸檬に促す。
「そうね」
檸檬もうなずき、そして綾崎先生に礼をする。
「ありがとうございます」
「どういたしまして」
綾崎先生はにっこりとそう答える。
「さあ、早く教室に戻りなさい。授業が始まるわよ」

「はい」
「はい。」
羽生と檸檬は同時に言い、保健室を出る。
「ふぅ…、魔法使いって、この学校にもいたのね」
綾崎先生はそうつぶやき、保健室の隅の机の椅子に座る。雑用があるのだ。
”行け”
治のベッドの下の男の合図により、向かいのベッドの下に隠れていた男が一人、掃除道具箱の中に隠れていた男が一人、そして治のベッドの下に隠れていた男が一人。三人の男が出、綾崎先生を取り囲む。
「うん？」
綾崎先生は、椅子から静かに立ち上がる。
「な……何なの、あなたたち」
綾崎先生は、命の危険を感じていた。その時、ドアのノックがする。
「失礼します」
校長先生が、保健室に入ってきた。何でこんな時に。逃げて、と綾崎先生は叫ぶが、三人の男は――――・・。

羽生と檸檬が教室に戻ると、生徒達は床の血をふき取り終えたと見え、それぞれの席に座っていた。教壇を見ると、富岡先生が立っていた。
「遅刻ですね」
富岡先生がそう言うと、羽生はぺこりと頭を下げる。
「申し訳ありません。」
「まぁ、しょうがないじゃないか。とりあえず、座って」
富岡先生にそう言われ、羽生と檸檬は自分の席に座る。
「それでは、これから朝のＨＲを始めます。の前に、転校生、立ちなさい」

富岡先生がそう言うと、教室の一番後ろの席のハルスが立ち上がる。
「こっちに来なさい」
「はい」
ハルスは堂々と、教室の前まで来るとみんなを向く。
「ハルスです。よろしくお願いします」
ぺこりと頭を下げる。同時に、富岡先生は白いチョークで黒板に字を書く。
”零時　ハルス”
「と、まぁ、私も聞いた事はないのだが、一応事情のある隠し子だったそうだ……、戻りなさい」
「はい」
ハルスはそう言い、自分の席へ戻る。生徒達は、そのハルスを注目していた。

「なんか、今日の転校生、髪の色が変だよね」
富岡先生が1時間目の準備をしに職員室へ戻っている頃、窓際の席の伊口(いぐち)が隣の席の朝風(あさゆう)に話しかけていた。
「そうね」
朝風もうなずく。
「どう? 僕たち、新聞部だし、調べてみちゃう？」
伊口がそう提案すると、朝風も面白そうにうなずく。
「面白そうね」
朝風も立ち上がる。

「うん……？」
治は、ぱちりと目が覚め、上半身を起こす。ベッド。保健室のベッド。そして、自分の体は、服は血まみれ。
「まぁ……」
ハルスにいろいろされたから当然か、でも体中はびんびんして元

もしかして、誰かが魔法をかけてくれたのかな。そうでないと、ね。気だ。ふいっと時計を見る。あれから時間はほとんど経っていない。
治は今度は視線を下ろし、自分の足の上の布団を見る、白い、と、思いきや、赤い、真っ赤である、自分の血、そんなに、たくさん出たのかな、ん？
自分の、視界の左端に、手が、一つ、ベッドに、乗っているのに、気付いた、その手は、赤い。
「なっ！？」
まさか、と、治は、思い、ベッドの上で、立ち上がる、ベッドの下で、白衣を、真っ赤にして、うつぶせに、なっている、綾崎先生がいた。
「先生！？先生！！」
治は、ベッドから飛び降り、しゃかみ、綾崎先生の背中を揺さぶる。しかし反応は全くない。
「先生ーーー！！」
「そこで、何をしている？」
治の横に、一人の男が立っていた。
「あ、あなたは？」
治はその男を見あげる。
「お前が……、殺したのか？」
「いえ、僕は……」
治は、なるべく冷静に答えようと思った。
「来なさい」
治の大量の冷や汗を見て、男は怒鳴る。
「現に、あっちで校長先生もお前に殺されているんだ」
「はい？」
「警察に突き出さないわけには行かないな」
治は目を点にする。
「い、いえ、僕が殺したんじゃないんです！」

しかし治の怒鳴りを無視して、男はポケットから携帯電話を取り出す。
「もしもし、警察ですか」
「だから、違うんです！信じてください！」
治は何度も怒鳴るが、男はその治の顔を一蹴りする。
「うろたえるな！ここは戦場だ！」
「なに訳のわからない事をいっているんですか！」
治は怒り心頭で立ち上がる。
「とりあえず、ここを動くな」
「そもそも、あなたは誰なんですか！」
確かにその小太りの男は、治が今までに一度も会ったことのない人。まだ春と言うに、真っ白の半そでのシャツを着ている。うすいグレーの半パンもはいている。
「俺か？俺は……」
その男は、にやりとして言った。
「俺は山崎だ」
「山崎…さんですか」
治は、驚いた顔をする。
「はじめまして」
山崎は急に、にこっとした顔になる。
「あっ、は、はい、はじめまして……」
治も急に、かしこまった顔になる。
「それじゃ、連絡ね」
山崎は、持っていた携帯電話を耳に当てる。
「結局するんですか！」
治は山崎に絡みつく。
「うろたえるな！ここは戦場だ！」
山崎はいきなり、先ほどよりも大きな声で怒鳴る。
「算数、難しかったね」

2時間目が終わったあとの休み時間、檸檬はそう言いつつ、机に左のひじを置き、右手でばらばらと算数の教科書をめくっていた。

そんな檸檬の机の前に、羽生の机があって、羽生も椅子に座ったまま、後ろの檸檬の方を向いていた。

「そう？あたしにとっては、簡単だけと。」

羽生は、当然というように首をかしげる。

「ねぇ……。」

檸檬は、羽生を見あげるように言う。

「何。」

羽生が返すと、檸檬は尋ねる。

「どうすれば、かおちゃんのように、なんでもかんでもできるようになるの？」

「そう？あたしはそんなにできないと思うけと。」

「何ができないの？」

檸檬は、目前の優等生にも欠点があるんだ、と思うとおかしくでたまらなかったのだが、ぐっとこらえてまじめな顔をする。

「そうね……、逆上がりができないの。」

「どうせならヒナ●クみたいに、高所恐怖症とかしないの？」

檸檬がそこまで言うと、羽生は立ち上がる。

「大丈夫よ。あたしは。」

「そ、そう……」

羽生はしばらくの間、ひたいを手で押さえ込んで、うつむいていた。その顔が深刻だったので、檸檬は思わず算数の教科書をめくる手を止める。

「あっ。」

羽生の視界に、教室の一番後ろの席のハルスが入る。

「ハルちゃん。」

「かおちゃん」

ハルスは立ち上がる。

「かおちゃん、久しぶりね」

「この前のテレパシーで、ざんざん話しこんだでしょう。」
羽生はにっこりとする。ハルスは、二人の方へ行く。
「それで、例の作戦はどうなの」
檸檬がハルスに尋ねる。
「順調よ」
「でも、魔法陣を張っていない家は、〝敵〟に見つかりやすいのでは？」
羽生が指摘する。
「あっ、それもそうね……」
ハルスが答える。羽生は続ける。
「魔法陣を作るには、長時間にわたる面倒な儀式が必要だけと、どうする？」
「もぉ、それだから最初から私の家に来ればよかったのに」
檸檬が割り込む。ハルスはうつむいてしばらく考え込んでいたが、やがて顔を上げると言った。
「そろそろ、居場所を変えないとね」

# 第9話　he　arrest

それは、突然に。
教室の外から、パトカーのサイレンが鳴り響いてくる。
それは、3時間目の社会の授業中のことであった。黒板に事項を書いていた富岡先生は、窓の方を見た。生徒達も、我先にと立ち上がり、窓の方へ集まる。
パトカー。パトカー。パトカー。運動場を埋め尽くすパトカー。
「一体、何があったの！」
羽生が叫ぶ。
「みなさん、席に座りなさい」
富岡先生が教壇から一喝するが、生徒達は窓に釘付けになっていた。
パトカーから、たくさんの警官が出てくる。警官は、こちら、下、1階へ入ってくる。
「警察だ！」
生徒達は、騒ぎだした。
「静かにしなさい！」
どんと、富岡先生は教壇を強く叩いた。しかし生徒達は、それを無視して窓の外ばかり眺めていた。

警官たちは、一直線、保健室の中へ入ってきた。
警官たちは、保健室の中に、二人の人影を認めた。
まだ春なのに半そでの、小太りのおじさんが一人の少年を指さしていた。その少年の服は、ほとんど真っ赤であった。
「逮捕する」
警官たちは、一斉に言った。警官たちは、その人の両腕に手錠をはめる。
「殺人未遂容疑で緊急逮捕する」

警官たちはそう言い、その人を引っ張る。
「ちょっと待ってください！殺したのはあの少年ですよ！」
と、わめく一人の小太りの男を。
「君、大丈夫？」
ぼんやりしていた治に、警官が一人、声をかけた。
「あ…いや、大丈夫です。それより、先生が……」
治は、真っ青な顔をして目をつぶり、後ろを指差す。悲惨にも、保健の先生は体中を全身血まみれにしていた。
「コメディー的描写をしてどうするんですか！殺したのはあっちですよ！あの少年ですよ！」
山崎は、警官たちに対して、何度も大きな声でわめいていた。

「やれやれ……」
富岡先生は、はあっとため息をつく。生徒達はみんな、窓の外を眺めていた。
「みんな、もうちょっと授業に集中できないのか？」
富岡先生は、ぼやいた。
『こちら放送室』
チャイムから放送が始まった。生徒達は驚き、教室前のチャイムを向く。このパトカーについての説明なのか、と誰もが思っていた。
『6年2組の五島君は、一人で至急放送室に来てください。繰り返します。6年2組の五島君は、一人で至急放送室に来てください』
チャイムでここまで流れると、生徒達は一斉に、五島君に視線を移す。
「五島君、早く行きなさい。」
羽生がそう促すと、五島はうなずき、走るようにして教室を出る。
教室には、ほとんどの生徒達が窓の所へ集まっていたが、一人、席に座ったままの生徒がいた。長谷川玲子。長谷川は、五島が教室

を出ると静かに立ち上がり、ぼそりと言った。
「うるさい」

一方、保健室では、警官たちがすでに状況検分を始めていた。治は、保健室から出され、保健室の隣の小会議室で警官から事情徴収を受けていた。
「で……、君は殺害の瞬間を見ていないわけですね？」
警官の質問に、治ははっきりと答える。
「はい」
「そうですか」
警官は、手元にもっている資料を元に、治に次の質問をする。
「あの時の事を詳しく教えていただけませんか？」
「はい」
治はそう言い、一呼吸をする。
「俺は、教室で怪我をしてからずっと気絶していて、保健室で目が覚めるまで全く覚えていません」
「何か分かることは？」
「あのおじさんの名前が、山崎ということだけです」
「そうですか……」
警官ははあっとため息をつく。
「一人が、殺された……」
警官がそうぼやくと、治は警官に尋ねる。
「一人？」
「はい、一人です」
「二人じゃないんですか？」
「はい？」
警官は、びっくりした。
「山崎さんが、校長先生も殺されたと言っていたのですが……」
「はぁ？しかし現場からは、綾崎先生以外は見つかっていません」
「でも、山崎さんは本当にそう言っていたんです」

「……そうですか、それではちょっと連絡してみます。君はここで待っててください」
警官は立ち上がると、静かに小会議室を出る。閉まるドアを見て、治は、上を見上げる。白。真っ白の天井。
「何でこんなことに……」
それから、治は、再度、はあっとため息をついた。

「ううっ……」
血。その部屋は、真っ赤に染まっていた。
「君が……なぜ」
一人の警官は、うつぶせになっていた。その警官の前に、先ほど治と向きあった警官は、立っていた。ここは小会議室のまた隣にある、倉庫。倉庫といっても収納するものはなく、空っぽそのものであった。
「ううう……」
「申し訳ございません、上司」
その警官は、倒れている警官の背中に、右足を乗せる。
「しかし」
警官はそう言い、先ほど一度腹に刺した、先が真っ赤のナイフを、背中に落とす。
血は、出た。飛び出た。
「ふふ……」
警官は、死んだ上司を見下ろし、それからポケットから携帯を取り出し、電話する。
「ヘファイストス様、マニフェクト通り伊代隆（いよたかし）を殺害いたしました」

給食も終え、昼休みになった。
校内での混乱を避けるべく校長先生の意思でこの件の校内放送は「保健室に警官が重要書類を忘れ、現在捜索中」とだけごまかして

いたため、生徒達はそ知らぬ顔で、保健室周辺が閉鎖されている以外は通常の校内生活を送っていた。
「ハルちゃん」
トイレを出たハルスを、檸檬が呼び止める。
「檸檬ちゃん」
ハルスはにっこりとした顔をする。
「で、いつこっちに来るの？」
檸檬が尋ねると、ハルスはうつむく。
「そうね……」
檸檬はそんなハルスを見て、ため息をつく。
「もういいや、自分で決めなよ」
「でも」
ハルスは、顔を上げる。檸檬は、黙ってほほ笑む。
「ねえねえ、これ、知ってる？」
いきなり廊下の奥から、一人の少女が走ってきた。そのかけ声がうるさくて、ハルスは後ろを向く。
一方、その少女は、離し相手ができたのが嬉しかったとみて、さっきよりも大きな声でハルスに言う。
「ねえ、保健室で殺人事件が起きたんだって！」
「えっ？」
ハルスと檸檬は、眼を丸くする。その少女、朝風(あさゆう)は続ける。
「しかも、治君が重要参考人として取り調べを受けているんだって」
「えっ？」
眼を丸くするハルスに対し、檸檬は朝風の両肩をつかみ、前後に揺さぶる。
「ねえ、それ、本当なの！？」
朝風はうなずくが、檸檬が揺さぶる幅があまりに大きく、激しかったため、檸檬はそれには気付かなかった。
「本当なの！？」

朝風は、再びうなずく。
「ねえ、何か言ってよ！」
「うん」
朝風が声を出して初めて、檸檬は朝風が先ほどから何度もうなずいているのに気付いた。
「……行くわよ」
檸檬が言うと、ハルスもうなずく。

「で、いつ終わるのですか？」
警官が小会議室に戻ると、治はしれったそうに返す。
「大丈夫ですよ」
その警官はにこっとして、治に語りかける。
「終わりです」
「あっ、ありがとうございます」
治は立ち上がり、礼をする。
「いや……本来礼を言うべきは私ですから」
警官は笑いながら訂正する。
「そうですか、それはすみませんでした」
「出る前に、その真っ赤の服ではまずいので、この服に着替えてください」
警官はそう言い、治の座っているソファーとその向かいのソファーに挟まれているテーブルの引き出しから、服、その下の引き出しから、スポンを取り出す。
「これに着替えてくださいね」
「はい」
治はうなずき、服を脱ぐ。
一通り着替え終えた後、警官は治に声をかける。
「それでは、もう出てかまいませんよ」
「はい」
治はそう言い、小会議室を出る。保健室周囲を囲んでいる、「K

EEP OUT 立入禁止」の黄色いラインをくぐろうとした時、
一人の少女に声をかけられる。
「ねえ！」
ハルスだった。
「ハルス？」
治は驚いた顔で、ハルスの顔をまじまじと見つめていた。

# 第10話　as dv as

「なぜハルスが学校にいる？」
治は驚いていた。
「普通、集団下校でもしているはずだろ」
「何があったか聞きたいのはこっちよ」
ハルスはそう言い、後ろから来た檸檬を見る。
「出て」
檸檬が言うと治はうなずき、ラインをくぐってラインの外に出る。
「で、何で治君が重要参考人になってるの」
檸檬が尋ねる。
「俺、犯人に間違われて」
「そうなの」
檸檬はそう言い、ちらりとハルスを見る。
「治」
ハルスは治に、そう言った。
「何だよ」
いきなりハルスに名前を言われ、治はどきりとする。
「そのまま捕まっていればよかったのに」
ハルスは平然とそう言い、ぷいと、すたすたと、歩いていく。
「え…あ…」
治と檸檬はしばらくあっけに取られて立っていたが、やがて治が怒鳴る。
「おい！ハルス、待てよ！」
「そうよ、そんな言い方ないじゃない！」
檸檬も共鳴する。
「やた」
ハルスは、後ろも振り返らずに、すたすたと、2階への階段を上る。

「待てよ！」
治が走り出すと、
「待ってよ！」
檸檬も、後をついて行く。
「待ってください」
後ろから警官の声がし、治はびっくりして立ち止まり、振り返る。
「何ですか」
治がいきなり止まったので、走っていた檸檬はどんと治にぶつかる。はずみで治は後ろに倒れる。
「あっ……」
檸檬が治を押し倒した形になる。
「な…何で、いきなり止まるのよ」
檸檬が恥ずかしそうにそう言う。
「だって、ねぇ……」
治も恥ずかしそうに、そう答える。
「すみませんが、」
そんな二人の近くから、警官は声をかける。二人は顔を真っ赤にして、立ち上がる。
「零時治君？君が？」
「はい、そうですけど」
治がうなずくと、警官はさらに言った。
「申し訳ないけど、治君とさっきまで話していた警官がいなくでねえ……心当たりある？」
「ありません」
治がそう言うと、警官は「そうですか」とだけ答え、再び黄色いラインをまだいて中に入って行く。
「なんなのよ、一体」
檸檬は恥ずかしそうにそう言う。耳までがピンク色であった。
「い…行くぞ」
治はその恥ずかしさを振り払うように、階段の方へ駆けて行く。

「待ってよ」
檸檬も治の後を追う。

「ねえ、さすがにあの言い方はないじゃないの！」
教室に戻って檸檬は、真っ先にハルスのいるほうへ怒鳴る。ハルスは自分の席に座っていた。ハルスはつんとした顔をしていた。教室の、前から2番目の、廊下側の席に座っている、細田被告（ほそだひこく）が、黙って教壇を指差す。見ると、富岡先生がそこに立っていた。
「遅刻ですね」
富岡先生にそう言われた。威厳のある声だった。治と檸檬は下をうつむく。
「はい、すみません……」
「それでは、席に座りなさい」
富岡先生がそう言うと、二人は黙って席に座る。

「いたか」
一人の、灰色のスーツの男が、暗闇で、一人の男に聞いた。
「いえ、まだ確認できません」
ここには、モニターがたくさん輪になって置いてある。１０段程度積まれている。１５人程度の男が椅子に座り、それぞれのモニターに目を光らせている。灰色のスーツの男は、その輪の真ん中の椅子に座って、マガ●ンを手に持っていた。
「またか……」
灰色のスーツの男は、部下の報告を聞くと再びマガ●ンを読み始める。
「師匠と弟子の漫画が同じ雑誌に載っていないとは皮肉だな」
などとつぶやきながら。
モニターには、たくさんの風景が映っていた。
「それでは、これで帰りの会を終わります」

富岡先生が教壇に立ってそう言う。

「起立。礼。」

6年2組の生徒達は立ち上がり、教壇に向かって一同礼をする。

「着席。」

6年2組学級委員長の羽生がそう言うと、生徒達は一斉に座る。

「それでは、さようなら」

富岡先生が言うと、生徒達は次々に立ち上がり、机の上のランドセルを持って教室を飛び出す。その様子を、富岡先生は愛らしく見つめていた。

「ねえ、治君」

廊下で、檸檬は歩きながら治に声をかける。

「何？」

治が答えると、檸檬は続ける。

「今日のハルちゃん、冷たかったでしょ」

「最初からだけと」

治が言うと、檸檬はさらに尋ねる。

「最初からって、どういうこと？」

そう言っている間に、玄関につく。靴を履きかえるのが面倒くさいとみえて、二人は、靴を履き替えている生徒達を遠巻きに見ながら、玄関の隅に移動した。

「もう一度聞くけと、最初からってどういうことなの？」

「最初に会った時から、隷（しもべ）呼ばわりされて」

「それで」

「いろいろ物を投げられたり暴言を言われたり殴られたり……」

「それは刑事訴訟に値しますな」

二人に、細田が割り込む。

「細田？」

治は迷惑そうに、細田の顔をまじまじ見る。

「刑法第204条、人の身体を傷害した者は、10年以下の懲役または30万円以下の罰金若しくは科料に処する（2003年当時）」

べらべらとしゃべる細田に対し、檸檬は一言。
「悪趣味」
「えっ？」
細田がいらっとした顔をして、檸檬をにらむ。檸檬は容赦なく続ける。
「だって、女の子なのにそんなものばっかり覚えて」
「暴言と侮辱ですね」
「しかも何でもかんでも刑に結び付けて」
「殺人未遂ですね」
「しかも何でもかんでもエスカレートするし」
「内乱ですね」
「うるさい」
治が怒鳴ると、細田は今度は治をにらむ。
「あなた、今、大勢の人の前で暴言吐きましたね。名誉毀損です」
「いいから黙れ」
「刑事告訴します」
細田は治を指さしてそう言うと、ぷいと行ってしまった。
「いいの？あれ」
檸檬が尋ねる。
「ほっとけ」
治は呆れた顔で言う。
「それで、他に何を言われたの？ハルちゃんに」
檸檬が再び尋ねる。
「わたしの事はご主人様と呼びなさいとか、言っている事がめちゃくちゃなんだよ」
治は勢いよく言う。
「そうなの」
檸檬は、ハルスと”長くつきあっている”ため、ハルスの性格について知っていた。ハルスが治をどう思っているか、すぐに気付いた。そして、その単語を言おうとした時。

「浮気?」
後ろからいきなり、聞きなれた声がした。治はビクッとして振り返る。
「隷なんかにご主人様を選ぶ権利はないのよ」
その少女は、ふるえていた。
「ししかも、ご主人様の讒言(ざんげん)を、ぬけぬけと……」
治は、真っ白になっていた。
「ああなるとわたしにも手に負えないから、ね」
檸檬はそそくさと、その場を立ち去る。
その少女は、治に絶望というものを与えた。生きるにも絶望。歩くにも絶望。進むにも絶望。戻るにも絶望。タイムマシンなんかできっこないということを花房●人に言われた時の気分。

「計画は順調かな」
暗闇で、一人は、もう一人に声をかける。
「はい、順調です」
黒いスーツを着ている、もう一人は、一人にそう答える。
「そう。それはよかった」
一人はそう言い、それから、小言で続ける。
「ヘファイストス」
「はい」
ヘファイストスと呼ばれたそのもう一人は、返事をする。
「リサ・ド・ブラウンの同居人も、場合によっては敵の戦力になる可能性がある。早急に消さないと、ね……」
「分かっております」
ヘファイストスはそう言い、近くの机の上のＡ４くらいの数枚の紙を手に持つ。その書類は真っ白であった。ヘファイストスがその書類に手をかざすと、書類に文字が浮き出る。その文章を読んで、ヘファイストスは落胆の声を上げた。
「……失敗だそうです」

「読み上げて」
一人がそう言うと、ヘファイストスはうなずく。
「一人の命令不履行により、該当人物は釈放。不履行者は処刑とのことです」
「そう」
一人はそう返す。
「ちなみに不履行者は誰？」
「はい、先ほど連絡がございましたが――――・・」

## 第11話　by kiss

「当然の事とは思いますが、校内での暴力は、厳禁です」
玄関の隅で、一人の少年、一人の少女は、一人の先生に声をかけられる。
「四月一日(わたぬき)先生」
治が声を上げる。治はハルスにぼこぼこにされていた。
「そうなの」
ハルスはつんと言い、その場から去ろうとする。
「待ちなさい」
四月一日先生がハルスに言う。
「零時君に謝りなさい」
「何でですか」
ハルスがつんと返すと、四月一日先生はいらっとする。
「当然でしょう。生徒を虐(しいた)げたら、陳謝(ちんしゃ)して然(しか)るべきものなのです」
その四月一日先生の使っている言葉の意味が分からず、ハルスは首をかしげる。それを、四月一日先生は、なぜ謝らなければいけないのか考えているのか、と思った。
「道徳で習ったでしょう、公正信義に信頼する行動を、みなする義務を有するのです」
四月一日先生が補足するが、ハルスはさらに首をかしげる。
「訳のわからない事をおっしゃらないでください」
「訳が分からない！？」
四月一日先生は眼を丸くする。ハルスは、文章の意味が分からないと言ったつもりなのだが、四月一日先生には、公正信義というものの存在意義が分からない、と聞こえた。
「問題児ですね」
四月一日先生はしばらく考えていたが、やがてぼやく。
その言葉がぎんと、ハルスの耳に刺さる。

「も…問題児ですか？　わたし、問題児ですか？　羽美ちゃんみたいな問題児ですか？」
　ハルスは泣きそうな顔をする。
「とりあえず、今は謝りなさい」
　四月一日先生がそううながす。ハルスは、治の方を向く。しばらく口の方がむすむすしていた。何よ。下の者に謝るの？　こいつなんかに謝るの？
「謝りなさい」
　ハルスは、ぐっと手を握る。問題児ですね。問題児ですね。問題児ですね。ぐっと目をつぶり、大きな声で治に言う。
「ごめん」

　ハルスは、空を見上げていた。
　問題児なのかな。わたしって、問題児なのかな。
　ハルスの後ろには、自分のものに加え、ハルスのランドセルを手に抱えている治が追従（ついしょう）していた。二人は、夕方、住宅街の道を、家に向かうところであった。
　ハルスは後ろを振り向く。
「ねえ、治」
「何だよ」
「敬語」
「あっ……」
　治は、昨日、今朝を思い出す。
「そ…そうでしたね」
　ハルスの専制によりやむを得ない。ハルスは続ける。
「わたし、問題児なの？」
「はい？」
　治は目を点にする。いや、びっくりしたのではなく、回答に詰まったのである。問題児に「問題児ですか？」と聞かれ、はいと答えたら暴力を受けるに決まっている。でも、いいえと答えたら……。

今後の横暴を考えると、背中がぞくっとした。でも、今受けるよりはまじか。治はそう考え、答える。
「いいえ」
ハルスは立ち止まる。
「ご主人様に、嘘をついてはいけません」
「え？」
夕日を背に立ち止まった治に、ハルスは杖を向ける。ハルスは、治をにらんでいた。
「ひぃ！」
治は真っ青になる。
問題児ですね。問題児ですね。問題児ですね。ふと、ハルスの頭に四月一日先生の言葉がよぎる。目の前の治はおびえている。自分におびえている。…………。
「怖いの？」
ハルスは表情を変え、心配そうな顔をする。
いかん。これは罠だ。俺にむりやりはいと言わせるつもりなんだな。俺を殺す理由を作ろうとしているんだな。すっかりの被害妄想で、治は震えながら後へ一歩すさる。
「い……いいえ、いいえ、いいえ！！」
「そう」
怖くない。相手は怖くない。しかし相手はおびえた顔をしている。ハルスは、治は、よほどの負けず嫌いだと感じた。怖いんだ。相手は怖いんだ。問題児。自分は、問題児。
「そう……」
ハルスは杖をわきに収め、うつむく。
「ど……どうしたんですか」
「何でもない」
ハルスはそう言い、うつむいたまま、方向を戻し、歩を進める。
問題児ですね。問題児ですね。問題児ですね。

「ねえ、わたしにして欲しい事って、ある？」
治の部屋で、いきなりハルスにそう尋ねられ、治はびっくりする。
あのハルスがこのセリフをしゃべるなどありえない。昨日と一変している。いつから？いつから？
「ねえ！」
ハルスは治の顔に近付く。あと少しで唇が接触しそうな近さで、哀愁満ちた顔でそう言われ、治は顔を真っ赤にする。
「ど……どうなったんですか、一体」
何が起こったか分からない治に、ハルスはさらに尋ねる。
「ねえ！」
何か言わないと、まだ機嫌が戻ってしまう。いや、今のままの機嫌をずっと維持してほしい。ということは、今すぐ答えないと……。
「ねえ！」
ハルスのあたたかい息が、治の口にかかり、治はどきっとする。
答えないと。答えないと。答えないと。
「そ……それじゃ、おとなしくしてもらおうかな」
治はそう言ってすぐ、後悔した。殴られる。いや、ハルスがやるには殴られるの域を超越している。治は、自分の頭を手で覆う。目をぐっとつぶる。顔は、真っ青になっていた。覚悟。
「わかった」
ハルスは治から離れ、とぼとぼと、そばのベッドに座る。
「え？え？」
治はそんなハルスを見て、何がなんだか分からなかった。
「と……とりあえず、俺はちょっと下へ」
「待って」
ハルスは立ち上がる。
「ご飯の手伝いでしょ？わたしが代わりにする」
「え？」
治はためらう。そんな治の一連の態度をまとめて、ハルスは再び

治を壁に迫る。
「わたし、怖いの？怖いんでしょ？」
性格は非常に悪いのだが、顔はとってもかわいい。ピンク色の瞳。ぷにっと突き出ている鼻。薄いピンクの唇。ピンクにてらっているほっぺた。治はどきどきする。
「怖いんでしょ？」
「あ……、はい」
心臓が止まらない治は、考える事もままならず、ぼんやりとした意識の中で答える。
「私、嫌いになっちゃった？」
「はひ……はい」
「そ、そんなぁ……」
ハルスはうつむく。
「ねえ……、わたしのこと、どう思っているの？」
「ええと……」
頭の血が多すぎで考える事もままならぬ治は、言葉を選んだりせずに、答えなきゃ、という一心に任せて、言う。
「暴れん坊……、怖い、そばに行きたくない、早く死んでほしい……でも……」
「そうなの」
ハルスの顔は、急ににっこりとする。
「正直に答えてくれてありがと」
問題児ですね、という記憶は、一時にして海馬につまみ出される。
「えっ……」
一変したハルスを見て、治は顔を真っ青にする。
「死んでほしい？私に死んでほしいの？死んでほしいんだ」
ハルスは、杖を取り出す。
「じゃ、あんたが先に死ねば」
ハルスは、杖を治に向ける。
「死ね」

一変したハルスの顔を見て、ああ……今夜も楽しい夜になりそうだ、と治は思った。
先ほどの「でも……」の続きに「とってもかわいいし……」が続くなんで思わずに、ハルスは容赦なく、治を楽園へ案内する。
その部屋。血。瀕死の重体に陥った治を、ハルスは見下ろす。
ハルスの頭に、別に考えもしていないのに突如文章が浮かぶ。テレパシー。
”ねえ、ハルちゃん？檸檬よ”
”なに？”
ハルスは、横になった治をまたいて、治の机の椅子に座る。
”ハルちゃん、そろそろうちに引っ越したら？”
”えっ？”
”ハルちゃんがこの世界に戻った事が、敵に知られたみたい”
”えっ！？”
”だから、少なくとも居場所を知られないために、結界を張った私の家へ”
”そ、そう……”
ハルスは、後ろで横たわっている治を眺める。
”明日にでも”
「ねえ、ごはんよ」
今度は頭からではなく、耳から言葉が来た。母。
”わかった”
ハルスは檸檬にそれだけ返すと、立ち上がる。
「はーい」
ハルスはそう答え、そして5月の夜空を眺める。
”ねえ、ハルちゃん、ちょっと、ついてに明日、あれを消してくれる？”
”えっ？なんで？”
”だって、ちょっと悪いけど、治君はもともと知る必要がないから”

〝えっ……？〟

〝それと、小学校に通うのも間違いだったみたい、敵に知られてしまったから、ごめん、今すぐにでも手続きをとるから〟

〝えっ！？〟

「えっ！？」

その非情な言葉に対し、ハルスは、頭で念ずると同時に、声も出てしまった。ハルスは椅子に再び、座りこんでしまう。

「明日……」

ハルスは再び、後ろの治を眺める。

# 第12話　last night

「いたか」

灰色のスーツの男は、モニターの輪の中心の椅子で、マガ●ンを読み飽きたらしく、下でばらばらとめくりながら自分はそれを見ずに、モニターを見ながら、監視している一人に尋ねる。

「依然として見つかりません」

その人が答えると、灰色のスーツの男は、「そうか……」と、失望の声を上げて頭を下げる。

「なあ、次のマガジンはまたか」

男が独り言のようにぼやく。

「明日でございます」

その部屋のドアが静かに開き、一人の女の人が部屋に入ってドアを静かに閉める。

「そうか」

男はそう返すと、腕時計を見る。

「今日はここまでだ」

男が言うと周りの、モニターを監視している人たちはうなずく。

「今日はもう帰っていい」

「あの」

一人が立ち上がる。

「何だ？」

「すみませんが……」

立ち上がった人は、戦々恐々としていた。

「ためらわないで早く言え」

「そ、その、今日、報酬の日でしたね」

「報酬？……そうか、そうだな、明日用意する」

「そ…うでございますか、ありがとうございます」

人は、ぎこちなく礼をする。男は、かん高い声を張り上げる。

「まぁ……、報酬を受け取る代わり、私に体当たりしたにもかかわらず謝ってくれないあの無礼な女を、見つけるのだ……！」
その男の顔は、年配の感じがした。

ハルスは、おぼんにご飯とお茶とたくあん、梅干し、お味噌汁を乗せて、階段を上る。部屋のドアをひじで開ける。
「隷（しもべ）」
部屋で仰向けに横たわっている治は、返事をしなかった。
「隷、返事をしなさい」
ハルスは、治を見下ろして言う。
「あ……んだよ……」
かすれかすれの声で、治は答える。
「晩ご飯よ」
ハルスはそう言い、しゃがんでおぼんを床の、治の頭の横に置く。
「痛い？」
「だ……れのせいだよ」
「隷の」
治の返事を待たずにハルスは、はしでご飯をつまんで治の口元まで持って行く。
「口、開けて」
治がゆっくりと口を開けると、ハルスははしをその口の中に入れる。
「おいしい……？」
ハルスは心配そうな顔をする。治の口からはしを抜き、改めて尋ねる。
「おいしい？」
「あ……あい」
「そう」
ハルスはそう言い、ご飯をもう一回はしでつまむ。
「実は、明日行かなければいけない事になって」

ハルスがそう言うが、治は何も言わない。ハルスは、そんな治を見守る。
「なぁ……」
1分くらいたって、治はやっと口を開く。
「ご飯」
「あっ、ごめん」
ハルスはそう言い、はしを治の口に近付ける。
「ねえ……、明日の朝、早起きできる？」
「でき……るかよ」
「後で治す」
「今…」
「もう、めんどくさいのに」
治が口を開ける。はしを入れて、との心算（しんさん）だったのだが、ハルスははしを、自分の口の中に入れる。
「おい……！？」
びっくりした治が何か言うが、ハルスははしをおぼんに置いて立ち上がる。わきから杖を取り出し、治を見下ろし、治に向ける。

檸檬は、着物を着て、自宅の椅子に座っていた。
右には大きな窓から、月が部屋を照らしている。その部屋の明かりは、ついていなかった。
檸檬は、左にひじをかけているテーブルの上の、茶碗を右手に取る。
「月の光って、きれいねぇ……」
檸檬はそうつぶやき、茶碗の茶を飲む。
「いつかしらね、人が夜を白くして洋服を着るようになったのは」
檸檬がそうつぶやく矢先に、携帯電話がなる。檸檬は、茶碗をひじをかけているテーブルに置くと、その横の携帯電話を手に取る。
「もしもし、岡田です」
「ああ、社長！」

電話からは、救済を求めるような、そんな感じの声がした。
「どうしたの、廣本」
「実は、今会社の株が下がっておりまして」
「どれくらい？」
「300円くらいです」
「……もうちょっと静観して」
「はい」
向こうから電話を切ってきた。檸檬は携帯電話を閉じると、椅子から立ち上がって窓の外を眺める。窓の下からは、広葉樹にも等しい植木がたくさん見えた。
と、その部屋のノックの音がする。
「入って」
檸檬が言うと、一人の中年の、スーツを着た女が部屋に入る。
「また部屋の電気をお切りになられて……」
女はそう言い、黙って電気のスイッチに手をかける。その部屋は、白くなった。
「蚊虻がたかりますので、カーテンをお閉めに……」
「分かった」
檸檬はそう言い、窓のカーテンを閉める。
「あ、いえ、社長様がなさらなくでも……」
「ねえ」
檸檬は、窓の外を眺めて、言う。
「あなた、秘書をやって何年？」
「はっ、左様でございます」
「5年でございます」
「5年もあって、私の会社もすいぶん成長して……」
秘書が答えると、檸檬は一呼吸おいて続ける。
「しかし、わたしはその代価を失いつつあるのかもしれない」
「はぁ……？」
「明日……、失いつつあるものが、家に来るから、用意をして」

「それは何でございましょうか」
檸檬は、ゆっくりと、後ろの、秘書のいるほうを振り返り、秘書の目を見つめる。
「真の友達」

「起きてよ」
治は、ハルスに体を揺らされる。
「あ、おはよう、ございます」
治はあくびをしながら上半身を起こす。かたわらにはハルスが座っていた。
「隷」
ハルスが言うと、治はざっと立ち上がる。
「な……何ですか」
「今、何時」
「何時って…、ええと、５時４５分です」
部屋のかけ時計を見ながら、治は答える。
「着替えて」
「あ、はい」
見るとハルスは、もうすでにパジャマから着替えていた。しかし、それは。
「その格好で、学校に行くつもりですか？」
ハルスは、黒いマントに、白いカッターシャツ、茶色のスカート。おとつい会った時と同じ姿であった。昨日は一日中パジャマか母のお下がりの普段着だったので、昨日は全く見ていないことになるのだが、やっぱり一日でも欠けると、初めて見たような気分になる。
「さっさと着替えて」
「は、はい」
治は慌てて、たんすの方へ行く。服と下着を取り出し、それからぴたりと止まる。
「どうしたのよ」

「あっ、あの、恥ずかしいので……」
「あっ、ら、そう、ごめん」
ハルスは恥ずかしそうに頬を赤らめて、部屋から出る。
「早く着替えてよ」
「はっ、はい」
治はさっさと着替えを終える。
「着替えました」
「そう」
ハルスは再び、部屋のドアを開けて入る。
「じゃ、行くわよ」
ハルスはそう言い、手ぶらのままで部屋を出る。
「あっ、ちょ……」
「ランドセルはいい」
ハルスがそう言うと、治も、おずおずと手ぶらで部屋を出て、ドアを閉める。

「ねえ、一番近くの公園はどこ」
家を出てから、治はハルスにそう尋ねられる。
「あっちです」
治があすこを指差す。
「案内して」
「はい」
治は、歩き出す。
もうすぐ6時なのだが、5月、もうすぐ夏至の6月である事もあり、空は明るかった。
公園に着いた二人は、ハルスのうながしで、公園の入口から見て左のベンチに座る。向かいにもベンチがあり、こっちにも向こうにもベンチの後ろに藤が植えてあって、時計台は向こうだけに立っている。ベンチは2つ、公園あわせて4つあり、二人は、入り口に近い方のベンチに座っていた。入り口の向かいには川が流れている。

入り口の方の道路を、白い車が一台通った後は、閑静としていた。
「ねえ、治」
ハルスに名前を言われる。
「何ですか」
治が答えると、ハルスは重々しく言う。
「ねえ、会ったのって、いつだっけ？」
「はぁ……、おとといです」
「おととい」
ハルスはそう言い、上を眺める。雲が浮かんでいた。
「雲は、自由ね」
「はい」
「……実はわたし、魔法使いなの」
「知ってますよ、そんな事」
「それで……、わたしには、倒さなければいけない組織がある」
「えっ？」
「その組織の名は、壁虎（やもり）……」
「はい」
ハルスは、今度はうつむく。
「……わたしは、あの日の復讐のために、この世界にやってきた」
「えっ？」
驚く治を横目に、ハルスは続ける。
「でも、あなたの家は駄目。存在がやつらに知られてしまった」
「と、ということは……」
治の顔が、ぱあぁっと輝く。ハルスは、そんな治の顔を向く。治は慌てて、表情を戻す。ハルスはしばらく口を閉じていたが、やがて重々しく言う。
「忘れてもらうの」
「えっ？」
無理にまじめな顔をしていた治の顔は、今度は自然に、疑問の顔になる。

## 第１３話　ｓｈｅ　ｌｅａｖｅ

「忘れてもらうの」
「えっ？」
無理にまじめな顔をしていた治の顔は、今度は自然に、疑問の顔になる。
「何を忘れるんですか？」
治が尋ねるが、ハルスは、首を横にふる。
「だから、何を忘れるんですか？」
ハルスは重々しく立ちあがり、脇から杖を取り出す。
「えっ？」
治は眼を丸くする。ハルスは、悲しそうな顔をして、杖を治に向ける。
「さよなら」
治は立ち上がる。
「な……何のつもりですか、一体！」
「だから、忘れてもらう、っていうことなのよ」
「ち、ちょっと待って……！！」
治のあせった声を無視して、ハルスは唱える。
「フォーゲット」
治は、その魔法がかかるや否や、ひざをついて、うつぶせに地面に倒れる。ハルスは、それを悲しそうに見下ろす。どうせ相手には伝わらないと思いつつも、出した一言。
「さよなら、好きだった」

その朝に、犬の散歩をしている太ったおばさんは、公園で、一人の少年がうつぶせになっているのを発見した。
「もしもし、警察ですか！？」
おばさんが慌てて家に帰ってした電話は、朝と言うに疲労と困難

に満ちたものであった。
警察は、うつぶせになっていた少年の検死を行い、まもなく気絶している事を確認した。その公園は、封鎖された。
その日の一ノ谷小学校では、朝から体育館で全校集会が行われた。一ノ谷北公園で、一ノ谷小学校の6年生が一人、うつぶせになっていた。事の一部始終を説明した後、校長先生は、「みなさんも不審者に気を付けましょう」と言い、解散となった。
6年2組では、いつもより1時間ほど遅れて、朝の会が始まった。
「では、出席を取ります。」
教壇の羽生はそう言い、名簿を上から順に読みあげる。
「五十嵐（いがらし）さん。」「はい」
「伊口（いぐち）君。」「はい」
「池田（いけだ）君。」「はい」
「伊勢田（いせだ）さん。」「はい」
「上下（ろもすびら）君。」「はい」
「白黒（はるなずみ）君。」「はい」
「花田君。」「はい」
「長谷川さん。」「はい」
「細田さん。……休みね、問丸君。」「はい」
「橘さん。」「はい」
「零時君……惣田さん。」「はい」
「謎十（なぞ）君。」「はい」
「村田君。」「はい」
「岡田さん。」「はい」
「大馬（おおば）さん。」「はい」
「夜久（やく）君。」「はい」
「前後（まうら）君。」「はい」
「前田君。」「はい」
「五島君。」「はい」
「是長読（これはよ）さん。」「はい」

「是早読（これさよ）さん。」「はい」
「朝風さん。」「はい」
「佐々木君。」「はい」
「桐生（きりゅう）君。」「はい」
「木全（きまた）さん。」「はい」
「三木さん。」「はい」
「十二月田（しわすだ）さん。」「はい」
「日向（ひゅうが）君。」「はい」
「二人、欠席です。」

　羽生は右の、教室の窓辺の、灰色の机に座っている富岡先生に、そう報告する。

「ありがとう」

　富岡先生は立ち上がり、羽生から名簿を受け取る。羽生は自分の席に戻った。富岡先生は、教壇から、生徒達を見回し、こう言う。

「さあ、みんなはもう分かっているかもしれませんが、うちのクラスの零時君が、今朝公園で見つかりました。ただ、単なる気絶のようで、今は自宅で寝ています」

　生徒達は、お互いの顔を見合わせる。

「医師によれば、明日にでも来れるだろうとのことです」

　富岡先生は静かに自分の記憶を読みあげ、そして一呼吸おいて言う。

「これで朝の会を終わります」

「ここは……？」

　その日のうちに、治は目を覚ました。

「あら、治君」

　治の母が、ベッドのかたわらの椅子に座っていた。ここは、治の部屋。治は、ベッドで横にされていた。

「母ちゃん、今日何日？」
「水曜日よ」

母はそう答える。治は、どきっとした顔をする。外はまだ明るい。
「今、何時？」
「ええと……、11時25分よ」
母は、部屋にかけてある時計を見る。
「学校！！」
治があせった顔をして動こうとするが、母は制する。
「まあまあ、今日は学校を休んでもいいわよ」
「えっ？」
治は、腰を下ろす。
「今朝、公園で見つかったの、覚えてる？」
母にいきなり、”今は知らない” 事を言われ、治はびっくりする。
「いや、俺は公園には行ってないよ」
「えっ？」
今度は母が眼を丸くする。
「俺、今日初めて起きた」
「えっ？」
「……明日、学校？」
「うん」
「そして、今日は休み？」
治が尋ねると、母はうなずいた。
「そっか……」
治は、窓の外をぼんやりと眺めていた。
「何で休みなの？」
「だから、今朝公園で気絶していたって」
「まーだ、いつもの勘違いだろ」
治は疑い深く問う。母は慌てて釈明する。
「連絡があったの、警察から」
「勘違いだろ」
治は立ち上がる。
「待って」

母が制するが、治は無視して、ベッドから立ち上がり、たんすへ行って一番上の、下着のある引き出しを開ける。
「あっ……」
治は、その引き出しの中身を見て、ぴたりと止まった。
「どうしたの？」
母が尋ねるが、治は母に言う。
「ご飯作って」
「はいはい」
母が部屋から出ると、治は、改めてそのたんすの中から、つまみ出す。一本の、木の棒。
「何だこれ？」
先がとんがっている。表面がざらざらしている。木の細い枝をぼきっと折った、そのもの。何でこんなものがここに？治はそう思い、その木の棒をまじまじと見つめる。
「……まあ、いっか」
治は、その木の棒をゴミ箱に放り投げる。そして、引き出しから、いつも通りに下着もろもろを取る。いつもと違うのは、時間。

それ以降、少年は、二日間共に過ごした少女を回想する事はなかった。

草原の上に、その少女は立っていた。上には、青空が広がっている。雲ひとつない青空。
「どうしたの？」
後ろから、もう一人の少女、着物姿の檸檬に尋ねられる。
「いや……、檸檬ちゃんの家の庭は、広いなあって」
「ねえ、つかぬ事を聞くけど」
檸檬は、その少女に尋ねる。
「もしかして、治君に恋をしたの」
その少女は、顔を真っ赤にする。

「ち……違う！」
少女がいきなり檸檬の方を向いたので、檸檬は一瞬ぎょっとなる。
「違う！わたしは、好きな人なんでいない！」
「ふふっ……、ははっ」
檸檬が手を口に当てて笑い出す。
「からかうのはよしてよ」
その少女、白いカッターシャツに茶色のスカート、黒いマント、そしてまぶしいばかりのピンク色の髪を背中まで伸ばしているその少女は、照れくさそうにそう言う。
「あいつは、もう会う事はないから……」
少女の語気は、次第に弱まって行く。
「まぁ……、運命は恋に打ち勝つから、ね……」
檸檬も、力なさげにそう言う。
「違うもん！好きじゃない！」
ハルスが真っ向から、大声で否定する。檸檬はくすっと笑う。
「違う！」
ハルスが怒鳴る。檸檬は、一つため息をついてから言った。
「まあまあ、さあ、家に戻ろう」

空は絶えずして　清きを崩さず
朝霧の向こうに　海は在る
自然をいとわず　自然を愛し
仲間と集いして　前へつき進む
我らが母校　一ノ谷小学校
「以上を以って兵庫県・姫娚市立一ノ谷小学校第1学期終業式を終わります」
教頭先生が体育館の舞台の教壇で礼をする。生徒達も一同礼で答える。
その日の教室で、富岡先生は教壇に立つと、生徒達に通知表を配ってから、帰りの会で言った。

「夏休みの宿題は昨日渡したのが全部です。持ち帰り切れなかった人は、今日全部持ち帰ってください。さて、明日からみんなの楽しみにしている夏休みが始まります」
富岡先生は、そこから生徒達の顔を見回す。早く終われ早く帰りたい、の面（つら）であった。
「小学生を卒業すると、部活やらなんだやらで夏休みの大半が侵食されます。つまり、夏休み全部が楽しめるのは、小学最後の学年である今年限りです」
生徒達は一斉に眼を丸くする。富岡先生は、声を張り上げて言う。
「なので、今年はしっかり楽しんでくださいね！」
「はい！」
生徒達は、一斉に言う。残念な顔をしている人、期待に満ちた顔をしている人、さまざまであった。
「おしまい」
富岡先生がそう言うと、羽生は生徒達に号令をかける。
「起立。」
「礼。」
「さようなら！！」
生徒達が一斉に言う。
「9月に、まだ会いましょう！」
富岡先生も、強く答える。

「さあ、夏休みだ！」
下校の道中で、治は、空を眺めながら、声を張り上げる。
「明日、俺の家に来いよ」
前田が治に言う。
「分かってる」
治もうなずく。
「ええと、市民プールはいつからだっけ」
前田が尋ねると、治は即答する。

「もうとっくに始まってるよ」
「そうだったな」
前田は、作り笑いをする。

## 第1部　後書き

### 1. 自作自演についてのおわび

平素は僕のバカクス小説に目を付けていただき、ありがとうございます。

さて、僕の以前書いた小説「神田先生」について、評価においての自作自演がございました。自作自演をした評価は、以下の通りです。

名前：是長読　２００７－０９－１６　１４：３２

つまらね

一体何が面白いのか分からない

※これは評価ではなく感想です

これは、僕の小説の評判が下がるよう、僕自身が意図的に仕掛けた文章です。以上の自作自演のくだりについて、深くお詫び申し上げます。今後、このような事をしないよう、鋭意努力していきます。同時に「小説家になろう」に投稿しています作者の方方には、「小説家になろう」を冒涜しました事を謝罪致します。

僕は、以前より、自分の小説は日本を代表するほどつまらない小説であると本気で思っております。したがって、僕の小説に対する５つ星は、一切認めません。また、今後、僕の小説を面白いと表現している感想については、その一切を狂言の極みとして無視致します。

今後の「小説家になろう」には、当分の間書き下ろしの作品は発表いたしません。４月６日に一挙第１話から第１３話まで掲載いた

します「門前」は、すでにどこかのサイトで公開されているものを、小説家になろうに掲載するものです。
今後も「小説家になろう」掲載小説において、僕の小説を一切無視していただけますよう、重ねてお願い申し上げます。

## 2．後書き

僕は、書かされる作家になりたいです。赤毛のアンとか、シャーロックホームスとか、兎角書かされる作家になりたいのです。自分は他のものを書きたいと思っていても、読者がそうさせてくれないのです。早く続きが読みたくでたまらない人が多すぎで、泣く泣く続きを書かされる、そんな作家になりたいです。
でも、僕の場合は１００％無理でしょうね。僕は死ぬまで永遠に、書かされる作家にはなることができないのです。なぜかって？絵が下手。文章が下手。僕の書く文章は、全てがつまらないものなのです。なので、誰も集まってこないのです。そんな僕は、もう死ぬしかありません。
以下は本来は第2部の後書きで発表する予定の文章でしたが、ここにも書いておきます。

ＫＭＹは死んだ。一度も面白い小説が書けずに死んだ。
どうせ僕はつまらない小説しか書けないのです。だから僕自身もつまらない。ある日、恐ろしい病気が流行しました。小説が書けなくなる病気です。たくさんの小説家が小説執筆停止に追い込まれました。あの「星河の覇●」でさえも連載が止まってしまいました。
しかし、そんな中で一人だけその病気にかからなかった小説家がいました。ＫＭＹでした。「僕が日本を代表して小説を書きます。そ

うです、日本の小説界はまだ衰退していない！」しかしみんなは、「ＫＭＹは小説らしいものを書いていないからかからなかったんだよ」と言ってきました。もっともです。みんなの言う事はもっともです。というか僕は生きていること自体が根本的に間違っている。そんな人生なのです。僕なんか、死んだ方がいい人なのです。僕さえこの世にいなければいいのです。そうです、僕は日本全体の小説のレベルの平均を著しく下げているのです。そうです。僕がいるせいで、日本全体の小説全体の価値の平均が下がってしまって、海外に評価されないのです。外人が読んでくれないのです。害人も読んでくれないのです。そんな人生。

　僕さえいなければ、日本はアカデミー賞万歳でした。僕さえいなければ、暫定税率は可決されました。（この文章は０８年3月２９日に書かれたものです）僕がいるせいで、みんなに迷惑をかけているのです。僕は、死んだ方がいいのです。

　門前はまだまだ続きますが、それによって「小説家になろう」全体の作家に迷惑をかけています。なぜなら、小説家になろう全体の小説の価値の平均を、押し下げているからです。もし平均が下がりすぎていましたら、というか今すぐウメさんには、例のボタンを押していただきたい。例のですよ、例の。アメリカの大統領がいつも持っていそうな、アレですよ、アレ。押したら、どっかーん。

　死ぬのは僕だけ。生まれないのも僕だけ。最近の自殺者は、全員ずるい。抜け駆けですよ。僕をさしおいて抜け駆けですよ。僕も死にます。さよなら。

## ３．門前のノベマガ連載について

門前は、以下のＵＲＬで連載されたものを一部修正したものです。
ｈｔｔｐ：／／ｏｒｏｔｉ．ｃｏｍ／～ｎｍｐ／ｎｏｖｅｌ／０

／001／index.html
門前のFirst Coursの完結に並行して、なるべく多くの人に僕の駄文を読んで絶望していただきたいと考え、ここにFirst Coursを一括発表します。
なお、Second Cours「帰ってきたハルス」は、すでに執筆は完了しており、上のURLでは5月より公開されます。書くのが遅い事をごまかすため、一週間一話の掲載となります。が、僕は非常に忘れっぽいので、指定した時間に公開してくれる機能は案外便利なのです。この機能はノベマガにしかありませんので、最新の話の公開は上のURLでさせていただきます。第2部の全話を公開次第（7月の予定）、こちらでもSecond Coursを、システム上この小説とは別の小説として公開します。
絶対に期待しないでくださいね。

## 4．ハルスについて

この小説は、2006年9月に公開されました「居候」をリメイクしたもので、登場人物の名前、居候の場面などは、できる限り忠実に再現したつもりです。さて、2006年9月現在あまり知名度のなかった「鈴宮ハルヒの憂鬱」をはじめとするハルヒシリーズにつきましては、2006年9月現在僕もその存在自体を知らず、ヒロインの名称は2006年9月になんとなく決めました。
ハルヒのパロディーだろ、とか指摘されるのが嫌なので、門前を書き始める時は、ハルヒと名前が酷似しているハルスの名前を変えるべきかどうか何度も悩みました。でも、この小説の非常に大切な登場人物の名前を変えるということは、僕にとって「面白い小説だね」と言われることの次の侮辱です。何度も迷った末ハルスの名称を使用した事を、ご了承ください。

なお、この小説「門前」とハルヒとは、全く関係はございません。

**ＰＤＦ小説ネット発足にあたって**

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9823d/

門前　First Cours「さよならハルス」

2010年10月8日15時50分発行